

千里に思える道のりを

ぼんる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

短め楽玲短編集。

主人公×ヒロインちゃんの縛りしかしてないので、普通の楽玲だけじゃなく、ちよつとえろいのもifルートもあります。前書きに書いてあるので注意。羽玲と18禁はタグの関係で分けました。

目次

黎明	2
深淵が深淵をのぞくニーチェスパイラル	5
チョコレート活用法	8
誘えない	12
誘い込み	16
The woman labeled	22
it "love"	25
ノーラベル・プロローグ	28
sweet garden	32
見せざる	36
ナンパ	36

熱	39
お前の前だけで、斎賀さんがそんな風になるの	44
週間VRフルダイバー、特集「プロゲーマー顔隠し独占インタビュー」より引用	47
私の可愛いお義姉ちゃん(仮)	51
シラハタ☆マイブライト	56
染まる色	62
ねっ	65
夢の先	70
counter	74
彼の瞳のその熱は、	82

惚れた方が負け、とはよく言ったもので。

85

なんてことない朝のはずだった |

89

クソゲーカセットは抜けない |

96

SS再録 |

100

短編再録 |

110

黎明

——夢を、見た。

あの雨の日、彼の笑顔を見る前の、淡々として起伏のない日常。色褪せた日々。

あの時彼を見かけていなかったら、自分はずっとあのモノトーンの世界にいたんだろうな、と夜更かしをしていつもより遅く起きた玲は思う。

『パラダイムシフト』なんていう世界が変わる瞬間は確かに存在していて、玲にとってそれが、あの雨の日、彼の笑顔を見た時だったのだ。

憂鬱な雨の中、楽しそうに笑っていた彼は太陽みたいで。鮮明に残った印象は、何回思い出そうともすり減ることなく、今でも色鮮やかに思い出せる。

彼の笑顔を見ていかなかったらどうなっていただろうか、とよく考える。

憂鬱でなかったなら、きつとこれほど鮮明に残っていないかった。少し時間がズレただけで、あの時彼を見かけることはなかっただろう。

その後彼の笑顔を見かける可能性だつてある。実際玲は何度も何度も、彼が笑顔で帰って行くのを見続けていた。

それでも、少しロマンチックかもしれないが、玲はあの日彼の笑顔を見た偶然を『運

命』と名付けたい。

あの日彼の笑顔を見ていなかったら、目指す大学も、高校ですら違っていた。ゲームなんて触れることすらなかった。恋なんてものを経験せず、お見合いをして、彼とまったく関係のない人と、家と繋がりのある人と結婚して。モノトーンな世界で、平らかな日常を淡々と過ごしたのだろう。

だから今、彼と共にゲームができることは奇跡に近く、彼が楽しいと感じている中に自分があることが、堪らなく嬉しい。

(——レイ氏と、呼ばれちゃいました)

本名を少し変えただけのプレイヤーネームを使用していたのは僥倖だった。自分の本名を呼んでもらうことに成功した玲は、昨晩の事を思い出し、幸せを噛み締める。

過去、幾度も姉に「レイ」と呼ばれ、その度に「姉さん、私はゼロです」と訂正していたのはすでに過去の事だ。「サイガ―0」は昨晩より「サイガ―0^{ゼロ}」ではなく、「サイガ―0^{レイ}」である

姉が執着し、彼に痕をつけた、『ジャングリラ・フロンティア』というゲームでも最強と呼ばれる七体の内一体、ユニークモンスター、夜襲のリユカオーン。それを彼と共に挑み、分け身であれど倒す事ができた。彼と共にゲームを楽しむ事ができた。彼の隣で戦う事ができた。彼と共に見た昇る朝日が目に焼き付いている。

どこを切り取っても昨晚の事は大切な宝物だ。

フレンドとして、またパーティーを組んで攻略をできる可能性もある。レイ氏呼びといい、一晩で大躍進だ。

(さて、今日は何をしましょうか)

シャンフロで次にやらなきやいけない事を考えながら、浮かれきっている玲はまだ知らない。

彼に『レイ氏』と呼ばれる度、壊れるくらい動揺してしまうことを。不意打ちで食らう名前呼びの恐ろしさを。

玲は、まだ知らないのだ。

深淵が深淵をのぞくニーチエスパイラル

「最近玲ちゃんとはどう？」

「玲さんですか？ 最大火力はだてじゃないと言いますか……頼りにしてます。よく一緒に攻略に行きますね」

（そーいうことを聞きたかった訳じゃないのよねえ……）

このクソゲーバカはなにもわかってない。時々……いや、よく、こいつのクソゲーカセットとエナドリホルダーを引っこ抜いてやろうか？ という衝動が脳裏を走る。まあ、よく一緒に攻略に行く、という事だけでも彼女にとつてはずいぶん進歩か、とずいぶん長い間玲を見てきた岩巻は思う。

「リアルではどう？」

陽務楽郎という人間は、ゲーム内では恋愛的思考回路を捨て去ってる節がある。だから玲にはリアルから攻めさせてる訳で。いや、攻めてるとは言いがたいけども。

この楽郎の女つ気の無さと、玲のヘタレ度合いが相まってここまで進展しなかったんだな、と再認する。

「うーん、最近なぜか前より目が合うようになりましたが特に何も……？ いつもバ

グってんなあとしか」

「バグってるって……そんな、ロボットじゃないんだから」

玲も少しくらい慣れてきてもいい頃だとは思う。毎日のように登校し、実質的デートイベントも幾度かこなしてるのにも関わらず、未だ挙動不審になるのは疑問を禁じ得ない。数年間話しかける事すら出来なかつた期間を越えての今なので土台無理な話なのかもしれないが。

(玲ちゃんもあのヘタレ具合を治せればねえ……)

いや、彼女のそれが治せたらこんなに苦労してない。じれった過ぎてキレそうだ。

「おつ、もうこんな時間か。すみません、もうそろり行きますね」

「はいはい、またねー」

新たななるクソゲーを手に入れ楽しそうに駆けていく楽郎を見送る。玲はあの笑顔に憧れたと、始めに目を追いかけて始めたきっかけが楽郎の楽しそうな笑顔だったのだ、と何度も聞いたが、悪魔に喜んで魂を売り渡す笑顔に惹かれるとは中々こう……

「えと、こんにちは」

「おー、よく来たね玲ちゃん。もう少し早く来れば楽郎くんがいたのに」

「いびやっいえ、別に、そんな……」

「いた方が嬉しい癖に」

「それはそうとも言えなくはないと言いますかっいえ、あの、そういうことではなくっ」
少しつづくだけで面白いほど反応を返す彼女をからかって遊ぶのは中々楽しい。楽
郎はクソゲーを楽しむようなマゾではあるが、玲の性質を正しく理解したらSっ気を発
揮しそうな気はする。しかし、今の認識はせいぜい『ゲームでもリアルでもストロング
だけど、不定期でバグる面白い人』レベルだろう。玲が動揺するのはいつも楽郎の事だ
と、彼は知らない。

「最近楽郎くんとはどう?」

「えと、シャンフロではよく、ふ、二人つきりで攻略をですね!」

「うんうん、君も大概ゲームに染まってるよね。リアルは?」

玲の顔が真っ赤に熟れる。

「あの、最近、楽郎君が、なぜかこちらを見てくるんです」

なるほど。進展はあったというわけか。つまりいつもバグってるように見えたのは、
楽郎が玲を眺めていたから、だと。……これは楽しくなりそうだ。

岩巻は詳しく話を聞こうと、玲に先を促した。

チョーカーの活用法

「斎賀さん、今日チョーカーつけてるんだ」

「えと……こ、恋人に、もらったんです」

大学に入学してから仲良くなった友人へ、耳や顔だけでなく、首まで真っ赤にしながら玲は答える。

「ふーん、彼に、かあ……」

熱持つ首をそつとさわると、質感の良い布が指に触れた。にやにやしている友人がさらに続ける。

「キスマーク隠しにもちようどよさそうだしね」

「キつつつつつ!!?」

「あは、慌てちゃってかーわいー」

うぶだねえ、と彼女が笑う。

高校の頃よりも伸びた髪は、首を隠してくれるけど、時々チラリと見えてしまうことがあるようだ。うなじによくキスマークをつける彼が、それを見て玲にチョーカーを買ってきてくれたのだった。

少し前まで楽郎は自分で把握していなかったようだが、彼はうなじが好きらしい。

よく視線を感じるし、そういうことをするときにはわりと高確率でそこにキスを落とし、さらにはキスマークをつけることもよくある。

それを玲が指摘したのは、つい最近のことだ。

『うなじをさわるとすぐに反応するよね』なんてどの口が言うのかと。そういうことをする度に楽郎が触れたから玲は過敏になったのだ。玲は楽郎に変えられてしまったのに、それを自覚していない楽郎が、少し憎らしかった。

『ら、楽郎君が、いつもふ、ふれるから、ですよ?』と指摘すると、自覚が無かった為か最初は慌てていたものの、開き直って自覚的にふれるようになり、あまつさえ玲をからかう材料にし始めた。

(べ、別にそれが悪いという訳では……)

玲が恥ずかしいだけである。彼の隣で歩いていくためにも、もう少ししつかりしたいとはいっても思っているが、まだ楽郎と共にいることすら心臓が痛いことから、玲が楽郎に仕返しできる日はきつと遠い。(実際は楽郎に向かつて玲はよくカウンターを食らわせているのだが、玲はそれを知らない)

「玲さんに似合うと思つて」なんて笑いながらチョコカーを渡してきてくれたのだから、玲は死にそうだった。そしてうなじにキスマークをつけた後、玲にチョコカーを巻

いて彼は言うのだ。

「ほら、隠せた」と。

「あー、なんか思い出してる？ 顔の赤さヤバイよ？」

「い、いえ、あの、そんな……」

楽郎の事だから、玲をからかうためか、いや、その後の反応を見るに、ただ隠せることを確認しただけの可能性が高い。確認為だけにそんなことをするのか？ 彼はするのだ。なぜなら自分がしたことの影響力をあまり考えない人だから。

無自覚でも、自覚的でも。どれだけ玲が楽郎に振り回されているのか、きつと彼は知らない。

「あ、彼氏くん来たよ」

「玲さん」

「ら、らくろ、くつつつ!？」

振り返ると、楽郎がそこにいた。先ほど思い出したことで赤みが取れない。今このチョーカーの下にあるキスマークのことを思い、玲は身悶えする。

「いつも玲さんがお世話になってます」

「なに？ マウントかな？」

「俺はそんなに狭量な訳じゃないんでね。ただの挨拶」

「ふーん、そう」

玲が何も言えない状態だとわかったからか、友人と楽郎が話し始めたのを見て、玲は話せるまでなんとか自分を落ち着かせるのだった。

誘えない

◆ 「えつと……今日も、シャンフロ、ですか？」

同棲している、恋人である玲さんにそう聞かれる。

「うん、そう。玲さんも一緒にやる？」

趣味^{ゲーム}をすることを尊重してくれ、あまつさえ一緒に楽しむことができるのは、まあいいわゆるゲーム狂いの俺にとってはありがたいことだ。そんな俺が人間性を失うほどのめり込もうとするのを現実に縫い止めてくれるのもまた玲さんであり、そんな所も非常にありがたいと思っている。

恋人なんて自分からは程遠い存在だと思っていたのに、それでも俺に恋人がいるのは、なにも『好き』だと言われたから、だけではないのだ。

「……………えと、やり、ます」

んー、何かフラグとか踏んだか？ 何かを迷い、諦めたようにみえる玲さんは、どこか複雑そうな顔をしていたが、まあバグるのはいつものことか、と流す。

「じゃあ俺先にログインしてるから」

「は、はい」

玲さんと行くならどこがいいかと想いを馳せ、俺はシャンフロにログインした。

◇

（行って、しまいました……）

夜のお誘いというものを、玲はしようと思いつめていたのだが、結局口にすらできないまま、彼は電脳の世界へ旅立ってしまった。

玲はもう、カボチャを模したキャラクターなどが描かれたそれを、外側から眺めることしかできない。

はしたない女だと思われたいだろうか、そもそもそれを言う勇気が出ない、なんていう理由もあるけど。一番は彼の楽しむ時間を邪魔したくないからで。

ずっと見てきた、あの楽しそうな笑顔の邪魔を、玲はしたくない。

ゲームが長引けば明日の為に眠らなければならず、すでにそのようなことをする余裕はないだろう。

（あ、明日には……いい、いえそ、そんな、楽郎君の邪魔をしてまでしたいという訳では

……)

結局明日も誘えないんだろうな、と悟りながら、玲は自分のVR機でシャンフロに口グインした。

……

……

……

誘おうとして三日目にして、玲は学んだ。

「えと、今日も、シャンフロ……です、よね」

誘い方をではない。楽郎が聞かずともシャンフロをするということ、だ。

一応玲にもまだ誘おうという気持ちはあるのだが、長年染み付いたヘタレ属性がまだ後回しでいいだろうとの判断を下させていた。楽郎が楽しめるのなら、そして結局ゲームでも二人つきりなので実質デートなのだから、という気持ちもあつた。誘えないならもう……の諦観である。

ここで先伸ばしにして今を諦めてしまう所が、玲がヘタレたる所以なのだ。

「玲さん」

「はい？」

ログインするための準備をしようとし、呼び止められたので彼の方を見ると、彼がゆらりと動いた。

「玲さんは今そういう気分じゃないかもしれないし、こういうのはズルいつてわかってるけど」

「え？ ひゃあつ」

玲の服の下からスルリと楽郎の手が潜り込んできて、お風呂後だったので下着を着けていない玲の身体をまさぐる。

そもそも誘おうとしていたのだから、気分じゃないも何もなく、玲の身体は簡単に解きほぐされていく。

ドロドロに溶け、自分と彼の熱の境もわからず、思考回路はもう働いていない。

「ね、玲さん、いい？」

熱を孕んだその問いに、玲はコクリと頷いた。

誘い込み

◇

「あのつつ」

「ん？ 玲さんどうしたの？」

なぜか少し意地悪気な顔で笑う楽郎に、玲はありったけの勇気を込めて話しかける。

今日こそは、と楽郎に対し夜のお誘いをしようと試みて現在三日目。前回誘おうとしたときは楽郎が自ら来てくれたが、毎回そうにもいかないだろう。受け身じやなにも変わらないことを、玲はすでに知っているのだ。

「えと、ですぬ……」

いざ誘おうとなると、先程までの勢いが萎んでしまい、玲は俯くことしかできない。自ら誘おうとすることのハードルの高さを実感し、諦めの感情が襲ってくる。

「うん」

優しげに頷いた声にそろりと顔を上げる。その顔に促されるように、玲は楽郎の裾を握った。

「あのっ……しっつ、しっつしまっ……しま、せん……か……う？」

さもすれば聞き取れないのでは、という程の小声で、されど彼女は言いきった。

楽郎は笑いながら、玲をのぞきこむ。

「なにを？」

「なつつえつと……」

玲は衝撃を受けた。無理だった。これ以上は言えない。無理である。『しませんか？』と聞くだけで勇気ゲージを使いきっていた。回復するには時間が必要だ。

「えつと、あの………しや、シャンフロを……」

がくりと肩を落とす。したいと口に出すことのなんと勇気のいることか。玲はもうキヤパシティーオーバーだ。

真つ赤に熟れ、落ち込む様子の玲を見て、楽郎は喉で笑う。

「そこでシャンフロって言っちゃうあたり玲さんだよなあ」

ね、玲さんと呼びかけられたので彼の顔を見ると、たいそう意地が悪く、そして色気を孕んだ表情を浮かべ笑っていた。

「ねえ本当にシャンフロでいいの？」

「いや、あの、」

「……俺はさすがにもうお預けを貰うのは無理かな」

その言葉で、わかって聞いていたんだと悟る。

「ねえ玲さん」

言つて、と。耳元で囁かれ、息がかかった。

玲は楽郎に懇願されたら断れないのに。彼が玲を見るその目の色が、欲望を確かに伝えてきていて。頭がくらくらする。熱が身体中に灯り、視界は滲んで、もうダメで。どうにでもなつてしまえ、と。

「くっつ 楽郎君と……え、えっちが、したい……です」

「……ツヤつバ、思つてたよりも攻撃力が高い」

楽郎がなにかをつぶやくが、玲の耳には届かない。

「え、あのっ」

「いいよ、しようか」

楽郎に誘われるまま、玲はベッドに押し倒された。

……

……

……



一昨日から、玲さんが俺を誘おうとしていたのはわかっていた。それでも俺から誘おうとしなかったのは、玲さんから誘って欲しかったからである。

玲さんが俺を誘おうとしていた、と知ったのはつい先日のことだ。それを知っていればすぐにわかるほど、なんでこんなに露骨なフラグに気づかなかったのか、というレベルで玲さんのお誘いモーションは分かりやすかった。これを気づかず俺はゲームにログインしてたわけだ。朴念人という評価はあながち間違いじゃないのかもしれない。

清楚、才色兼備、高嶺の花。それを地で行く彼女が、俺を求めているという事実が、俺の思考回路を溶かすのだ。

昨日の事を思い出す。

まだ玲さんはいい出せなさそうだったので「先にログインしてるから」と言っただけでログインして、残った玲さんを観察して遊ぼうかと。

薄目を開けると、業務用VRに入った俺を見る玲さんが視界に入る。

「楽郎、君」

玲さんが露出した手に触れ、ゾクリとした感覚が走った。

ログインしてないことがバレないため、動かないようにする事にとつともなく神経を使う。

「今日も、誘えませんでした」

色気を孕んだ息が俺を誘う。絡めてきた指が、彼女の熱を伝えてくる。

衝動で押し倒そうか迷った。ここまで我慢してきたけど、もういいんじゃないか？

玲さんが自分から俺を誘おうとしてんだから押し倒したつてなにも問題は、

「楽郎君が待つてるでしようし、私も早くログインしないと」

玲さんの言葉で我にかえる。名残惜しそうに離れていく指先が、スルリと手を撫で、その感触に背筋が震えた。

(あ—————、くそっ)

まだ身体に熱が灯ったまま、天をあおぐ。業務用VRの中だから視界はほとんど変わらないが。

玲さんより先に待つてないといけないので、玲さんが離れて行ったのを確認し、俺もシャンフロにログインした。

余裕があるふりをして、いつも俺も玲さんと同じくらい余裕がない。カッコつけて取り繕い、そんなところはなるべく見せないようにはしてるけど。

昨日もそうだが今日だって、玲さんが勇気を出さなくて、俺を誘う言葉が吐けなかったとしても、押し倒してた自信がある。色々限界だった。

誰だよ、セルフ放置プレイみたいなことしようとか考えたやつ。俺だわ！

もうあんな焦らされるような真似は、絶対に無理だ。何度押し倒そうと思ったか。

玲さんが誘おうとしているのだから、我慢する必要は本当にあるのか、という疑問が幾度も頭を掠め、それでも玲さん自身の口から「したい」の言葉を引き出す為に細かい理性で衝動を抑え続けた。

「もう二度とこんなことやんねえ……」

現実でもクソゲ味を自ら求めるような変態じゃねえんだよ、俺は。最終目標は達成したが、その間の行程は二度と繰り返したくない。

そう誓い、俺は隣で眠っている玲さんの髪をもてあそぶのだった。

The woman labeled it "love"

最初は、ただの疑問だった。だけど、もしかしたらあの時から、すでにそうだったのかも知れない。

なぜ彼は、どんなときでもあんなに楽しそうに帰って行くのか。そして、何が彼を楽しそうにさせているのかと。

少しずつ少しずつ並行して疑問は増え、その間も玲は彼を目で追い続けた。ただ疑問と、そしてあの時感じた眩しさが玲の頭を占めていて、自分の感情に考えを向けることなんか思い当たりもせず、ずっと笑顔で帰って行くその姿を追いかけ続けていた。

——そして岩巻にラベルを貼られて初めて、玲はその名前が恋だと知ったのだ。恋なんて、自分とは程遠いものだと思っていた。物語でも、友人達が語っていても、ずっと向こう側にあるようにしか感じられず、ひどく他人事で。

だからそんな感情を自分が持ってたなんて考えもしなかった。貼りつけられたその

ラベルは、心にピタリと嵌め込まれ、あたかも前からずっとそこにいたような顔をして、今もそこにいる。

岩巻がいなかったら、玲はこの感情に恋なんて名前がついていることを知らなかっただろうし、むしろその感情の存在にすら気づけないまま、彼の事を目で追いつけるだけだったのだろう。

玲は人との巡り合わせに恵まれている。それはあの日彼を見たことしかり、そして岩巻と出会った事しかり。巡り合わせによつて今があり、彼と共に戦い、楽しみ、歩いていく事ができる。

だから玲は、今日もありつたけの勇気を握りしめ、前に見える黒髪をしたその人に早足で駆け寄つた。

「お、おはようございますっ」

「あ、玲さん。おはよ」

「は、はいっ」

くありと欠伸をした彼に数瞬見惚れ、頭は話の種を探し始める。

楽郎とほとんど毎日のように登校を共にし始めて、すでに三ヶ月が経過した。夏休み前の玲であれば、夢には見れども信じる事ができないような進歩である。

振り返ってみると、確かに玲は少しずつ進んでいて、楽郎に近づく事ができて。それ

が、玲には堪らなく嬉しい。

今はまだ、挨拶をするだけで一日分の勇気を使いきってしまったようで、告白なんてまだできる気がしない。

なおこの話を最近「じれったいのよね、あんた達」などと言って、長姉とは別ベクトルに過激な事ばかり言い始めた岩巻にしたら「玲ちゃんあなたどれだけ勇気を貯める期間があつたと思つてるの」と呆れられてしまったが、それはそれ、これはこれである。その期間の勇気はシャンフロでフレンド申請したときや、リアルで話しかけた時なんかに使いきってしまった。

そう、たとえ一日分の勇気を使いきった気さえしようとも、玲は、今、隣で歩いていく楽郎と、もつと近くにいれる権利が欲しい。隣で歩いていけるような、共に支え合つていけるような、そんな権利が。

そのために、今ある勇気をかき集め、着実に一歩一歩進んでいかなければならないのである。

萎んでしまいそうになる気持ちに活を入れ、玲は楽郎に話しかける為に口を開いた。

ノーラベル・プロローグ

中学のある時から高校で進路が分かれてしまいうまで、ずっと目で追いつけていた人がいた。

なぜあんな風を楽しそうに帰って行くのだろうと、疑問を頭に占めながら、玲はその人のことをただ見続けていた。クラスが同じになったこともあったが、特に話すこともなく。

それでもずっと、眩しさと共に脳に住み着いていて、中学を卒業して十年経った今でも、ふとした瞬間、彼を思い出す。

「この愚妹には男つ気もなく」

「うちの息子も趣味一辺倒で女つ気がないですねえ」

25歳になり、もうそろそろ結婚を考えろということ、祖父の友人の息子の方とお見合いを組まれ。

そして玲の目の前に、今でも覚えているその人、陽務楽郎が、いた。

「あとはごゆっくり」

「はあ」

気の抜けた返事を返した彼を見る。

変わってしまったな、と思う。大人になって、顔つきも、身体つきも変わっている。今の気だるげな雰囲気を見るに、あの楽しい笑顔は大人になるにつれて無くなってしまうのかもしれない。

だけど、そこに中学生の頃の面影があった。

「えつと……俺、無理矢理連れて来られてよくわかんねえ状況なんすけど」

これ、お見合いってことでいいんですよね？ と聞かれたので、肯定を返す。

玲が彼の事を覚えていようとも、玲が一方的に見ていただけの関係でしかなかったから、きつと彼は玲の事を覚えていない。この感じを見るにお見合いも、玲に興味があったわけではなく、父親に言われて来たのだろう。

それでも玲は、この人にはまだあの時の笑顔が少しでも残っているのだろうか、と気になった。

「えと、あのつご趣味は……!」

あ、なんかお見合いっぽい。と彼はぼそりとつぶやき、そして彼の瞳の奥に、あの楽しげな煌めきがよぎった。

「えつと、VRって分かりますか?」

「はい、姉……先程の方ではなく、下の姉がVRゲームのしゃんふろ? というやつに傾

倒してました」

「なるほど、でしたら話ははやい」

彼が熱が灯った気がした。その瞳に自分が映つてることに夢心地さえ感じた。きつと彼の本質は変わっていない。あの時楽しそうに走つて行つた彼は、今もここにいる。

滑らかに先程までとは違つて少し楽しげに話し始めた彼に、中学生だったあの日の情景がピタリと重なつた。

「えつと、私もVRゲームとやらを、やってみたいのですが」

「へ？」

彼がなぜあれほど楽しそうだったのか、何が彼を楽しませていたのか、そして今に続くそれが何なのか、玲は知りたいたと、そう思った。

「えと、教えてくださいますか？」

「はあ、いや、別にいい、ですけど……」

——そして彼女は、楽郎に勧められたゲームショップへ赴き、その女主人に彼へと向ける感情の名前を教わる。

sweet garden

——『恋』を、している。

中学生だったあの雨の日、あの笑顔に憧れた時からずっと、目で追いかける事しかできなかつた時も、ゲームで共に戦っていた時も、玲は楽郎に恋し続けている。

それは、結婚した今でも変わらない。

時がたてばこの想いが風化してしまうのかもしれないと思つた日もあつた。だけど、今でも玲は楽郎に想いを抱え続けており、近くに彼がいるだけで心臓が跳ねる。話してだけで多幸福感に包まれ、彼と隣に並ぶだけで嬉しくなる。視界に入るだけで喜び、想いを受けると脳が溶ける。

だけど、追いかけて、動揺して、心が忙しくなくて。そんな恋だけだったのに、共にいると安心感を得るようになったのはいつだったか。今も動揺だつてしてしまふし、恋もしているけど、毎日のように愛しさも積み重なつていく。時間を共に経て一番変わったのは、この想いの捉え方なのかもしれない。

薬指に嵌まっている指輪を、そつと撫でる。

結婚したことで、法的にも隣で歩いていく権利を得た。ただ目で追いかける事しかできなかつた時から願ひ続けた事が今、現実となっているのだ。

「玲さん」

いきなり話しかけられたため、肩を少しビクリとさせ、振り返る。

「はい、なんですか？ 楽郎君」

楽郎に少しづつ慣れて、玲はどもらず返答できるようになった。

「次の試合の事なんだけど」

玲の隣に楽郎が座る。プロゲーマーとして活動するようになった楽郎をサポートするため、玲は試合に毎回ついていく。そのため、予定の擦り合わせをして、計画をたてる。

（夫の仕事を支えるのも、つ、妻のつとめ、なので……）

ゲームの練習相手をしたりもする。そんなに勝てる訳ではないが、少しでも楽郎のためになれる事に、玲は嬉しく思う。

「昔は話しかけるだけでバグってたよね」

「そう、ですね」

仕事の話が一段落して、楽郎がそう言った。

プロポーズされたときには衝撃やら嬉しさやら幸せやらで、楽郎の言うところの『バ

グ」とやらをしまくってしまったが、最近の玲は楽郎と落ち着いて話せている。まだ時々どもってしまったりすることももあるものの、先ほどもどもらず返答できたし、非常に成長を感じる。

「玲さん」

「へっ」

横に並んで座っていた楽郎がいきなり玲の首に顔をうずめた。

「びえっつ」

「はは、バグった」

楽しげに跳ねた声で笑う楽郎の息が、玲の首筋にかかる。

「ら、らくろう、君っつ」

ただ話しかけるだけで動揺することは少なくなったものの、毎日心が忙しないのは、楽郎がからかってくるからでもある。玲の反応を面白がって、なにかと仕掛けてくるのは、非常に心臓に悪い。

「あー、面白」

「からかわないでくださいっ」

「それは確約できないなあ」

玲さんの反応が面白いのが悪い、とそのまま玲の膝に頭を落とし膝枕の体勢になった

楽郎の頭を、玲は軽くこずいた。

見せざる

「あー、目の前でいちやつかれるのは勘弁してもらいたいのだが」

「だってさ、玲さん。ほら」

「ダメですつつまだこうしててくださいいっつつ」

妹の恋人と会うことになった。お見合いから逃げ回っており、さらにそんなものを経験したことのない自分には『恋』というものはよくわからん感情だ、と百は思う。

(しかし、あの玲がこうも大胆になるとは……)

目の前でおそらく恋人だろう男を後ろから目隠しをしている玲を見て思う。

恋というものは、ここまで人を変えるのだなあ、と。

「男の方は大きな胸を非常に好むと聞きました。姉さんは、姉さんの胸は、あ、あんなものを楽郎君が見てつつ」

「大丈夫だからとりあえずこの状況なんかならない？ なにも見えないんだけど」

玲の動揺を慣れたように受け流しているのは、まあ思い違いじゃなければシャンフロのあの半裸鳥頭な『スピードホルダー最大速度』サンラクだろう。特段特徴もないように見えるし、服も

着ているが、まあゲームとリアルは別である。百も自分の重たいものを削った。

「玲お前、後ろから自分の胸を彼の頭に押し当ててるように見えるがそれはわざとなのか？」

「あー、それ言ったら」

バツと目隠しをしていた手を離れた玲が楽郎から距離を取る。

「ち、ちがつ、え、あ、そ、そんなつもりではっつ」

「うん」

「ち、違いますからあああっつっ!!」

「あー」

玲が走り去っていった。なんなんだいったい。

「あーどうも、サイガー100、でいいんですね？」

「ああ、それでそっちはサンラクか？ あと、リアルでは百でいい……いや、玲がまたなにか言うか？」

あんなに嫉妬みたいな事をしといて二人つきりにするとはどういうつもりなのか。後で正気に戻ったときにこちらになにか言われても困る。

「では百さん、と。玲さんはまあ大丈夫じゃないかと思えますけどねえ」

見れば見るほど普通の青年だ。これがあの空をかつ飛び燃えたり化け物になったり

高笑いしたりする百に勝った半裸の鳥頭（鮭頭の時もある）なのか。

「玲は君の前ではいつもああなのか？」

「そうですねえ」

彼は苦笑した。

しばらく話していると、扉が叩かれる。

「すみません、取り乱しました」

スツと部屋に入ってきた玲はすでに落ち着いていた。

目の前で楽郎の隣に座った玲の耳元に、彼がなにか囁き、玲の顔が赤く染まってぼすりと彼の背中を叩く。

（曲がりなりとも姉の前だぞ。いちやついている自覚がないのか、こいつらは……）

まあ、未来の義弟と我が妹の将来は安定だなあ、と思う。自覚的にも無自覚的にもこうも見せつけてくるとは。

先ほど玲がいなかったときに玲の事を話す彼を思い出す。あの不審な挙動を愛しさを滲ませて話す彼に百は悟った。ああ、玲の一方通行な訳じやなく、玲も愛されているのだと。

『恋』というものは、やはり自分からは遠い世界だなあ、と思いを新たにさせ、百は今夜はどのカップラーメンを食べようかと思案するのだった。

ナンパ

「凄く可愛いね。俺とお茶でもどう？ おごるからさあ」
「いえ、人を待っているのでお断りします」

大学生となり『清楚な高嶺の花』だった玲は、楽郎と付き合ひ、化粧をし、華やかさをグツと増していた。素のままでも十二分に顔面偏差など総合値がずば抜けているにも関わらず、恋、そして恋人の存在がその可憐さを引き上げている。

あんなこんなをしたことで花開くように出てきた色気もよくなかった。高校時にあつた清楚さを残しつつ、その清楚な装いや振る舞いからのぞく色気は、ギャップも相まつて非常に威力が高い。

結果として、玲はナンパホイホイになった。

高校の時もよく告白されてはいたが、大学生となり、軽い誘いが増えた。彼氏がいる、ということ隠していないにも関わらず、この手の誘いはとどまる所を知らない。

この誘いのめんどくさい所は、玲が彼氏持ちだと知った上で話しかけている。また
は、玲のことを知らない”のほとんど二択な所であり、しつこく非常に煩わしい。

楽郎のことを悪く言われた際、玲が一度制裁お話ししたを加えたことがあるため、彼氏の存在を知り、かつ楽郎を貶す、といった人間は大方いなくなつたものの、それでも乗る気が欠片もない誘いを幾度も繰り返されれば辟易もしてくる。

目の前でペラペラと話しているこの人は、おそらく玲の事をよく知らないのだろう。玲の『待ち人』は大方楽郎であり、その時点で知っていたらなんらかのアクションを起こすはずだ。

「待つてるのってお友だち？ その子も一緒にいいから」

話を聞き流し無視していたが、触られるのは嫌なので、伸ばされた手を避けようとして後ろからグツと引き寄せられ、頭がぼすりと彼の胸に着地した。

「俺の玲さんに、なにか？」

「」

固まつた玲の頭上に楽郎の手が置かれる。近い。非常に近い。

楽郎となにか言い合い、目の前にいた男が去つていくが、玲はもはやそれどころではない。

「玲さん、大丈夫だった？」

「ひっ、ひゃい」

先ほど引き寄せられた体勢のまま、楽郎が玲を上からのぞきこむ。非常に近い。

また固まった玲を見て、自分が原因で玲の挙動がおかしくなっていることを察した楽郎が玲を解放し、それでやっとな玲は正気に戻った。

「す、すみません。お手数煩わせてしまい……」

「こつちこそごめん。玲さん一人で待たせたらああいうのが寄ってくるって事知ってたのに」

もつと気をつけておくべきだった、と吐き捨てるように楽郎が溢す。

「いえ、別に、あの、だ、大丈夫ですから！」

ぶんぶんと勢いよく手を横に振り、そのしぐさを見て楽郎が笑う。

「これでも彼氏なんだから、頼ってくれると嬉しいかな」

「あふっ」

その言葉に、また玲は停止し、そんな玲を見て楽郎は再び笑った。

「待たせてごめん。じゃあ行こうか」

「は、はいっ」

目の前に伸ばされた手に、玲も手を伸ばした。

熱

「熱が……あります、ね」

「ええ、マジで？」

なんか頭がボヤアってすんなあ、とは思ってたけど熱か。昨日ちよつとの距離からいかと思つて雨の中走つたのがよくなかつたな。

心配そうにしている玲さんに、俺はすぐさまベットへ戻される。『心配』が先にあると距離が結構近くてもバグんないのか。そんなに過保護にならなくていいと思うんだけど。

「食欲はありますか？」

「んー、そんなにない、かな」

「では朝食にはリングゴでも剥きましようか」

キッチンへとかけていく背中をぼんやりと見つめる。わざわざ剥いてもらうのはちよつと申し訳ないな、と立ち上がろうとして、ふらりと身体がベットに戻ったことで、自分の体調が思っていたよりも悪いことを悟る。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「じー、と見られながらだと少々食べにくい。俺を心配そうに窺っている玲さんに顔を向け、少し考えて玲さんを見て顔を傾ける。

「あーんとかしてくれないの？」

「へえあつ、え、あ？」

「ははっ、じよーだん」

慌てる玲さんをニヤニヤ眺めながら、綺麗に切られたリンゴを口に運ぶ。

あ、という言葉を連呼して動揺していた玲さんは、自分が面白がって見られてることに気づき、頬を膨らませた。

「ごちそーさま」

「はい、お粗末様です」

「ん、ありがとう」

お皿を引き取られ、枕元には飲料水などが用意されていく。

「あ、そうだ。楽郎君、ゲームはしちやダメですからね」

「え」

「ゲームは、ダメです」

「いや、でも」

「ダメです」

「あ、ハイ」

威圧感を発している玲さんにたじろいで頷く。

「楽郎君のお母様にも聞いてますよ。ご実家ではちゃんと病気の時は療養していたんですよね？」

「ハイ」

「でしたらきちんと寝てください」

「ハイ」

ゲームは絶対しちやダメですよ、と念押しされ、大人しくベッドに潜る。

信用が無え。いやでも確かに言われなかったらこの体調でも変わらずログインしただろう。心配かけてるな。少しむず痒い。

大人しく瞼を閉じると、思っていたよりもすぐに眠気が襲ってきた。

「楽郎君？ 眠ってしまいましたか」

瞼は開けられないけど、玲さんが近寄ってきたのはわかった。

「好きですよ、楽郎君」

頭を優しく撫でられる感触。

「はやくよくなってくださいね」

柔らかな笑みがふつてくる。ふわふわと微睡みに包まれ、俺は完全に眠りに落ちた。

……

……

……

「あ、楽郎君起きましたか？」

「ん、はよ」

「はい、おはようございます」

起き抜けだからか、ぼーとする頭で返答する。

「あ、あのつ、おかゆ……食べれ、ますか？」

「うん」

頷くと、キッチンから玲さんが器を運んでくる。

「えと、ですね……」

「うん？」

布団の側に座り、躊躇いがちにこちらを見ていた玲さんは、意を決したようにそれを

掴んだ。

「あ、……あ、あーん」

目をつぶりながら、こちらに向けられたぶるぶると揺れるスプーンに一瞬動きが止まる。真つ赤になりながら先ほどできなかつた事を頑張っている玲さんに、可愛いな、と思いつつながら俺は口を開いた。さて、どれだけこぼさず食べられるかね。

お前の前だけだぞ、斎賀さんがそんな風になるの

「れ……斎賀さん？　いつもバグ……挙動不振で面白い性質してるよなーって思ってる」

ため息……？　なぜだ。お前らが玲さんへの印象聞いてきたから正直に答えただけじゃねえか。わざわざ答えてやったのになんだその反応は。

「これ、わざとだと思うか？」

「いや、陽務の事だしなにもわかってないに500円」

「ここにいる陽務以外全員そう思ってるからその賭けは無効だな」

「このゲーム馬鹿がっ」

「うるせえポエマー。七の段は言えるようになったんでちゆかあ？」

え、なんでなにも分かってない癖に反論できるの??　との言葉は黙殺する。

どうして俺いきなり罵られたの？　あの玲さんに『挙動不振』だの『面白い性質』だの言ったのがよくなかったか？

でもなー、玲さん正直そんな感じだよなあ。バグとか言わなかったただけマシだろ。

「あー、そうだ。ゲーム友達なんだろう？ ゲームでは？」

「まあ、頼りにしてる、かな」

廃人だつてことは流石に言えねえ。俺はプライバシーの守護者なので。

こいつらの中にあのオルケストラ戦を見てるやつがいる可能性もあるし、なるべくそういう不安要素も排除しておきたい。学校にあの動画を拡散でもされたら、死……！

「陽務く、他には？」

「え、まだやんの？ もうよくない？」

「他は？」

恋愛要素とか一切ないゲーム友達だぞ？ そういう評価にもなるし、俺への風当たりが強くなるのおかしいだろ。

正直言えば言うほど視線が刺さりまくるからもう止めた……はいはい言います言います。だから言えつて圧力かけてくるの止めろ。

「他かー。あー、強い。頭がいい。身体能力が高い。よくフリーズする。時々おつかない。まあ、だけど良い人。信頼も尊敬もしてる。いつ見ても大体完璧なのさすが玲さん。所作が綺麗。育ちの良さがうかがえる。意外とノリがいい。あとは……」

「陽務、ストップ」

「あ？ 何？」

お前らが言えつつつたんだろ。と軽く非難の目を向けると、ん、と顎で示された先に玲さんがいた。うお、本人に聞かれるのはちよつと恥ずかしい……あれ？

「玲さん？」

「……………」

ギギギギギ、と音が聞こえそうな挙動で玲さんは俺の方へ視線を向ける。

「らく、ろう、君？」

「ん、どうしたの？」

「……………つ、……………つ！！」

あ、バグった。やっぱ俺の認識間違っていないんだよな。こういう性質の人なんだよ、玲さん。

「しえあつ、しつれいしますたっつ！！」

「あれ？」

なんか用事があつたとかそういう訳じゃねえのか。どうしたんだろ。

ぼん、と肩に手を置かれ振り向く。

「陽務」

「なに？ ……フレに呼ばれたので部屋抜けますね！」

俺ただ話してただけじゃねーか!! お前ら本当になんなんだよ!!

週間VRフルダイバー、特集「プロゲーマー顔隠し独占インタビュー」より引用

(前略)

——えー、ここまで魚臣慧さんなどのプロゲーマー仲間の話や、好きなゲーム、某社のエナジードリンクなどの話をしてきましたが、顔隠しさんと言えど！ 全米一であるシルヴィア・ゴールドバーク氏を下したさいにプロポーズをされたことでも有名ですよ。ね。

顔隠し「ちよつ、それまだ引つ張るんですか？ やめてくださいよ」

——おそらく一生ネタにされ続けますよ。諦めたほうがいいと思いますwww
さて、SNSでもよく騒がれている顔隠しさんの愛妻家っぷり。そんな奥様とのなれそめをお聞かせください。

顔隠し「彼女とは高校生のときに知り合いました」

——ほう、学生時代からですか。

顔隠し「いやあ、彼女が言うに中学も一緒だったそうなんですけど、なにぶんその頃からゲームに目がなくて。彼女の事をほぼ認識してなかったんですよね」

——さすがですね。

顔隠し「彼女と知り合ったのも、とあるゲームがきっかけです」

——タイトルはなんですか？

顔隠し「めちやくちや有名ですよ。『シャングリラ・フロンティア』です」

——ああ、あの！

顔隠し「wwwはい。あれです。俺は彼女の後に始めたんですけど、彼女けっこうやりこんでる人で。彼女、ほんこつな所もありますが大体何でもできるんですよね。たとえばゲームでも。最初に会ったときに、このハイレベルプレイヤー、名前だけでも覚えておこうって思いましたもん」

——その時顔隠しさんはそのプレイヤーを奥様だと知らなかったんですか？

顔隠し「はい。そのあとリアルでも毎日話すくらい仲良くなったのですが、その間も俺は二ヶ月くらい彼女だと気づきませんでした。彼女は元々別の知り合いから聞かされていて、俺だとわかってたらしいですね」

——なるほど。

顔隠し「そこからリアルでもゲームの話をするようになり、うん、まあ恋愛的なあれそれがあつて今に至ります」

——めちやくちや略しましたね!?

顔隠し「自分の恋愛事は語るもんじゃねえな……と思ったので。あと単純に恥ずかしい」

()で追及しようとしたがのらりくらりとかわされたため、次の話題へ)

——では、奥様は『プロゲーマー』という仕事をどう思われているんですか？

顔隠し「応援してくれてますし、支えてくれていきます。彼女がいなかったら勝てなかった試合はいくつもあります。あとはゲームができるから練習相手にもなってますね」

——ほほう。練習相手ですか。

顔隠し「はい。試合前には彼女とよく戦ってます。これは大きい声では言えないのですが、実は結構負けますね……」

——ええ！ 顔隠しさんがですか!? ちなみにどのくらいの割合で？

顔隠し「6：4でギリギリ勝ってます。プロゲーマーとして、そして夫としての意地を見せるのに必死ですよ」

——奥様はプロゲーマーだったりするのですか？

顔隠し「いえアマチュアです」

——はあー、凄いですね。この話を聞いた事務所の方が奥様をスカウトしたりするんじゃないでしょうか。

顔隠し「ええ？ まあもしそうなくてもこの世界に来るかどうかは彼女の意思ですか
ら」

——なるほど。では、顔隠しさんは奥様についてどう思っているのでしょうか。

顔隠し「可愛い人だなあと思ってます。いつまでも反応が初々しくて、ついからかっ
ちやいますね。彼女は大体なんでも完璧にできる凄いい人なんです、時々のもぞかせるば
らんこつな所も魅力の一つです。挙動が不審になるのも可愛いんですよ」

——はい、ノロケいただきましたー！ ありがとうございます。

(後略)

私の可愛いお義姉ちゃん（仮）

「あはは、玲さんってやつぱりわかりやすいですね」

「いえ、あの、そんなことっ」

「こんなにわかりやすいのにスルーしてきたお兄ちゃんさあ」

「……いいだろ、今はもうわかってるんだから」

「わ、わかっ!？」

ぷしゅう、と真っ赤になり、玲が固まる。

兄の些細な言動で、こうもわかりやすい反応を示すのに、兄は気づいてなかったんだな、と思うと鈍感唐変木ゲーム中毒と言わざるを得ない、なんて、瑠美は自分のフアツシヨン中毒を棚に上げて思う。

こんな兄の恋人であるこの人は、こんなに美少女で、さらに所作なんかも良いとこの家柄なのがわかるような、きつと高校では『高嶺の花』などと分類されてそんな人なのに、誰が見てもわかるほど兄が好きなのだ。兄には非常にもつたいない。

「じゃあお兄ちゃん、玲さんもちってくから」

「は？」

唐突な事に頭がついていっていない玲を置いて瑠美は玲の手を取り、兄に向かって言い放った。

「玲さんとデートしてくる。お兄ちゃん、ついてこないでね」

「え？」

「おい、瑠美！」

ねえ、玲さん。いいですか？ と下からのぞきこまれ、玲は思わず頷いた。

……

……

「玲さんはこういう服も似合うと思うんですね」

瑠美に引つ張られるようにしてついた先は、近くのショッピングモール。素材が良いから楽しいですねー、なんてココロ笑う瑠美に、玲はされるがまま着せ替え人形と化していた。

「さて、どんな服がいいですか、お義姉ちゃん？」

「おねっつ」

お義姉ちゃん、と呼ぶだけで真っ赤になった玲に、瑠美はにんまり笑う。少しからかうだけでこうも反応が返ってくるのだ。面白くないはずがない。瑠美がからかつてしまうのは致し方ない事である。

『あの』ゲームにしか興味がなく、恋愛を捨て去つてるとしか思えない兄の、恋人である。

初めて会った時は、まだ二人は付き合つてはいなかつたものの、玲はやはりわかりやすく『なんでこんな美少女が兄の事を?』と思つたものだ。しかし、この人はとにかく兄の事が好きなのである。一途に必死で恋をしている、可愛い人なのだ。

——瑠美が背中を押して応援したくなるほどに。

……あれに惚れるのは瑠美には理解できないけど。なんといつてもクソダサジャージ男なので。

「可愛い服着て、お兄ちゃんをぎやふんと言わせましょう」

「へあつ?」

え、いや、そんな、なんて言つて慌てだした玲に瑠美は笑う。瑠美にできる背中の中の押し方は、これくらいだ。

「言わせたく、ないですか?」

意地悪くそう言うと、玲はまたすこぶる慌てた後、ともすれば聞こえないほど小さな

声で「い、言わせたい……です」と肯定した。

……

……

……

「ふふん」

いつもと雰囲気が違う玲を見て固まっている兄に、瑠美は自慢気に笑う。

今玲が身を包んでいる服は、いつもの清楚で爽やかな色をしたものとは違い、濃い色合いでキリリと引き締め、少しの露出で妖艶さをも醸し出している。しかしそれは可愛いらしいと言える範疇に収まっており、彼女自身の清楚さを逆に強調していた。髪の毛は瑠美に編み上げられ、一つ付けられた髪飾りが良いアクセントとなって全体の雰囲気を纏めている。

「お兄ちゃん、なにか言うことは？」

その一言に硬直が解けた楽郎が頬に色を刺し言う。

「あ、ああ。玲さん似合ってる。可愛い」

「か、かわっ!?!」

挙動がおかしくなった玲しか見てない楽郎に満足感を覚えた瑠美は、私が全身コーデイネートした玲さんは可愛かろう、なんて玲の後ろで笑った。

シラハタ☆マイブライト

「チツ、このクソが！」

「へいへい！ その鳥頭ビビってんのかあー？ もつと掛け金つりあげていいんじゃないの??」

「腰抜かしてんじや屁もないね」

「言うじやねえか」

円卓上でカードゲームをしてるらしきあの三人は、サイガーゼロの部下である。

電脳世界を掻き乱す外道衆。サイガーゼロは、その頭目だ。ゼロは白銀の鎧に身を包み、いつも話さず円卓に座している。無口で淡々と事を為すからか、冷酷無慈悲だと部下たちにも恐れられていた。

電脳世界では混乱を引き起こす外道衆であろうとも、現実^{リアル}でだつて日常がある。頭目という立場上知っている、目の前にいる彼らの現実^{リアル}での顔は、それぞれカリスマモデルとプログラマー。そしてもう一人は、サイガーゼロこと齊賀玲の同級生、陽務楽郎だ。

……

.....

外道衆の頭目にして最強最悪の終焉の魔法少女サイガーゼロ。白銀の鎧から魔法少女形体に変身して、今はその形体のまま円卓に座っている。

目の前にある円卓は、一つ空席がある。そこにはもうきつとその人は戻ってこない。キメラヘッド・サンラクは、暗黒魔法少女となりマジカル☆アカネとの激闘の末、どこかへ行ってしまった。

煽り合いながらもサンラクと絡んでいた二人の空気は、心なしか重たい。ゼロはいつものように無表情で、それを眺めるだけ。

その空席には不在が座っている。

.....それでも、ゼロは。

.....

.....

.....

外道衆の拠点に乗り込んできた電腦魔法少女マジカル☆アカネを、終焉の魔法少女サイガーゼロは上から見下ろす。

一人ひとり、とこのマジカル☆アカネに倒されていき、今ここに残っているのはサイガーゼロだけ。

「この方が最後ですっ！ ノワリンさん、行きますよっ！」

『ああ！』

「リミテッド!!」

リミテッドアカネに変身したアカネに構わず、凜とした声が静かに響く。

「ゼロローマ数字に存在証明ゼロはない」

ゼロの下に巨大な魔法陣が現れた。そこから光と闇が吹き出し、彼女の胸元の宝石が輝きます。それに同調するように銀髪が揺れ、赤い目が妖しく光る。

彼女が指でステッキをなぞると、その部分からステッキはゼロの身長に迫るほどの大剣に変化していく。

「さあ……、始めま、しようか」

「この電腦世界を、あなたの好きにはさせませんっ！」

白と黒が混じり合い威圧感を醸し出している大剣を、ゼロはアカネに向ける。アカネ

がごくりとつばを飲み、武器を構え、一瞬。

ガキーーーとアカネの小刀とゼロの大剣がぶつかり合い、衝撃波が生じる。その衝撃を受け流すように、アカネは後ろへ飛んだ。

「マジカル☆フォール」!!」

ゼロに向かって魔法を飛ばすが、大剣を持っているのにも関わらず、ゼロはすべて回避する。

「ではこちらも行きます。【XII 灰神楽】」

ゼロの周りに渦巻いていた光と闇が大剣へと収束し、ゼロは大剣を振りかぶった。

……

……

「リミテッドアカネといえど、この程度、ですか」

ゼロはひどく他愛ない、とでも言うように涼しい顔で眉一つ動かさず、服の端からエフェクトをこぼれ落としながら倒れ伏すリミテッドアカネを見下ろした。アカネの周りは破壊痕がいくつも残っており、先までの惨劇を物語っている。

「まだまだあつ」

「これで……終わり、です」

ボロボロになりながらもアカネはその目の中にある星のきらめきを一層輝かせる。そう、アカネは、諦めない。諦めないのである。再び立ち上がって武器を構えたアカネへ、ゼロは大剣を振りかぶる。

「ちよーろーろーろーつと待ったあー!!」

「へ?」

「え?」

勢いよく飛んできたドロリとした暗黒がアカネとゼロの間に突き刺さり、踏み出そうとしていた二人はたたら踏む。

「——すまん、ボス。この世界を消されたら、クソゲーができなくなって困るんだ」
砂ぼこりの中から女の子のはつきりとした声が響き、ゼロの動きが止まる。

黒魔法少女、サンラクがいた。そこには喪服のような黒を基調にしたコスチュームに身を包んだ暗黒魔法少女、サンラクがいた。電脳世界の外ではゼロの同級生、そして過去は外道衆としてゼロの部下であった彼^{彼女}である。暗黒魔法少女に変身した後、どこかへ行ってしまった、その人だった。

彼女は顔のほとんどを黒い布で隠されており、そこだけ見える口元が笑みを描いている。

それを視界に入れた瞬間、ゼロの纏っていた光と闇が消え失せ、戦場に合った威圧感がふつ、と消滅する。

彼女の彼の楽しそうな笑顔は、いや、彼女が、彼女自身こそが。いつでもどこでも、どんな姿を
していても。ずっとずっと前から、玲にとつてはいつも眩しく映る、たった一つの
輝く一番星。

そう、彼はゼロの

ゼロと相對し、あの楽しそうな笑顔をしているサンラクを見て、ゼロの口から自然と
言葉がこぼれた。

染まる色

「ごめん、玲さん寝てるから」

寝てるもなにも、俺の言動で気絶してしまっただけだ。玲さんの友人が話しかけてきたので、そう返す。

春のぼかぼかとした陽が降り注いだ、大学の中に隠れるようにあるベンチ。そこに座っている俺は膝の上に玲さんの頭を乗せ、玲さんはそのまま横たわっている。いわゆる膝枕の体勢だ。

玲さんは付き合う前からよくバグっていたし、まあそういう性質のお人だと思って過ごしてきたが、俺に関することに反応してバグつてるとは、付き合ってから知った。

俺の言動一つで、分かりやすく好意を示してくれるんだから、つい、からかいたくなる。それでやり過ぎてしまうことも、しばしばで。

すっかり赤もひいてきた頬を見て、先ほどの事を思いだし、ふっと笑みをこぼす。

「あー、お熱いことですかあ」

「ん？」

ぼそつとつぶやかれた言葉を聞き逃す。

「いや、スカートの中見えちゃうかもだから上着でもかけとけば？」

「おー、さんきゅー」

「玲に『先帰ってる』って伝えといて！　じゃあね」

去っていった玲さんの友人の助言通り、とりあえず自分の上着をかけておく。有難いこつて。

意識を失っている玲さんの髪に落ちてきた桜の花びらを拾い上げ、そのまま透けるような茶色をした髪をすく。ふわふわとした柔らかな質感は、いくらでも触っていれそう
だ。

今はそんなに赤くもない顔が、俺の手で林檎のように熟れるのを、今の俺はよく知っている。それが、なにを示すのかも。

髪のを指でもてあそんでいると、玲さんがまつ毛を震わせた。

「……………」

漏れでた声を聞いて、玲さんを上から顔をのぞきこむ。

「起きた？」

「へ？　らくろ、くん…………？」

まぶたを開いた玲さんが、俺を瞳に映す。ぼんやりとした顔が徐々に覚醒していき、

一気にぼふんつと赤くなった。

「おはよ、玲さん」

「えあ？　へっ？　くくくッ!!」

勢いよく起き上がろうとしたので、額を抑え、起き上がれないようにする。

玲さんのバグリ方にも慣れてきて、反射で対処できるようになった気がする。今のは対応はSS評価を狙えるんじゃないかなろうか。

抑えた額の温度が熱く、先まで白かった頬は見る影もない。

玲さんがこうなるのは、俺のせいだと、俺はすでに知っている。その事に対して思う感情は、嬉しいとかだけじゃなく、優越感なんかもあって、まあ少し汚なくもあるのと言わないが。

玲さんが起き上がった事を少し残念に思いながら、俺が気絶させたようなものなのに気絶したことを必死で謝る玲さんを宥めた。

ねっ

「らくろ……君？」

普段は完璧を崩さない人が今日は抜けていて。いつも顔が赤いからか、玲さんは熱でもそんなに変わらない色をしている。

「えと、ゆめ……ですか？」

ぼわりとした、焦点が合っていないような目で俺を見ていた玲さんは、ふと俺の手に顔を擦り寄せ、ふにやりと笑った。

「あー、」

普段は触れるだけでバグり散らすのに、そんなことをするからに、この人は。

玲さんと付き合い始めて少し。デート、逢い引き、まあ名称はなんでもいいが二人で出かけ、次の日。玲さんが熱を出したとの連絡が斎賀家からもたらされた。

お見舞いを、と斎賀城に来た訳だが、寝ていた玲さんは俺が来た物音で起きてしまっ
たらしい。

すぐそばにあった俺の手を取ってその熱い顔に当て、まだ寝起きではつきりとしていない雰囲気で、玲さんは俺から手を離さない。

ふと、閉じられていた目が開いて俺を見た。

「わたし、らくろくんのことが、すき……なんです」

いきなりの不意討ちに、ぐ、と一瞬言葉が詰まる。

「……うん、知ってる」

勘弁して欲しい。熱でバグる回路が死んでるのか？

——普段はそんなこと、バグって言えない癖に。

「ほんと、ですか？」

「うん」

付き合い始めた時に知った玲さんの気持ちは、知っていれば非常にわかりやすく、毎日のように好意を実感させられる。赤くなる頬も、不審になる挙動も、詰まる言葉も、バグっているのも。いちいち俺に好意を示す。

ただ、玲さんはそれを口には出さない。正しくは出せないのだ。だから付き合い始めたあの時以来のそれに、俺は衝撃を抑える。

そんな俺の内心を知ってか知らずか、いやたぶん知らないんだろうけど。玲さんはなにかを懐かしむように遠くを見た。

「ずっと、ずっと前から、らくろくんのことが、すき、で」

「わたしのせかいを、あぎやかにしてくれて」

「……うん」

「こういうことを、つたえられればいいのですが」

「起きるときは、いつも勇気がなくて、いえないんです」

「好意を言葉にできない事を気にしてるのだ、といった事を、ぽつぽつと熱によつてか拙い口調で言う。

「つたえられたらいいなあ、つて、いつも」

そこで言葉を切つた玲さんは、遠くを眺めていた目線をこちらを向けた。

「らくろ、君」

「……なに？」

ぼやぼやしながら俺の目にはひたりと視線を合わせる。

「らくろ君のこと、すきだつていえるまでがんばるので、」

切実さを滲ませ、ぐつ、と俺の手を強く握つた。

「……まつてて、くれますか？」

その言葉に、色んなものを飲み込んで、意志がこもる瞳に応えるようしつかりと目を合わせる。

「……うん」

——待ってる。

俺がそう言うのと、玲さんはふわりと笑い、すーすー、と寝息をたて始めた。その安らかな顔を見てドッと脱力感が襲ってくる。離されていない手とは反対の手で、俺は自分の髪をグシヤリと握った。

「伝わってるんだよなあ」

吐いた息は、言葉にならず消えた。

……

……

「えつと楽郎君が出てくる、夢を、見ました」

「あーうん。はいはい。そういう処理なのね」

「え？」

「いや、なんでもない。そうなんだ」

目が覚めて「なんで楽郎君がここに!？」などとバグった玲さんは、眠ったからかい

もの顔色……、いや、この赤さは熱なのかバグってるからか判断がつかない。しかし、先の夢の中にいるようなほわほわとした雰囲気は消えていた。

「えと、」

「ん？」

なにかを覚悟をしたように、布団の端を握り、俺を見る。

「楽郎君に、伝えたい事が、あるんです」

「うん」

「まだ勇気がでないので……もう少しだけ、待っててくださいますか？」

不安そうに俺を見上げるので、頬杖をついて安心させるように笑う。

「……うん。俺はいくらでも待つし、玲さんのペースでいいからね」

俺がどんな気持ちかわかってないのが少し癪で、俺は手を伸ばして玲さんの頭を撫でる。一瞬なにされてるのかわからなかったのかフリーズしたあと、玲さんはいつもみたいにバグった。

夢の先

なんだかやけに鮮明な夢を見た。

揺りかごの中にいるような安心感に包まれ、夢から現へ浮上する最中、玲は思う。

あの雨の日から、玲は幾度も彼の夢を見てきた。自分が楽郎に向ける感情の名前が『恋』であると知ってからは、彼と交際する夢も。

それは例えば、彼と勉強会をする夢であったり、彼と共に食事をする夢であったり、彼と出かける夢であったり。

だけど、今見ていた夢は、覚えている夢の中でもずっと鮮明だった。彼と二人で、デートを、する、夢。

頭がほわほわとするほどの体温の高まりも、バクバクと耳元でうるさい心臓も。彼が自分に触れた感触も、彼が自分にくれた言葉と、その声色も。

全部が全部、現実味があった。

ふと、なんで身体が揺れているんだろう、と疑問に思い、玲の意識は一気に現実へ浮き上がる。呻きながら目の前にあるものに顔を擦り付けると、胸がドキドキする匂い。

「あ、起きた？」

その声にパチリと目を開けた玲は『楽郎に自分が背負われている』という現状をやつと認識した。

「~~~~~ツツ?!」

「つつ、危ないからつ、玲さん今バグるのはちよつと抑えて」

（お、抑えてと、言われましてもつつ）

楽郎にさらに迷惑をかける訳にはいくまいと、玲は必死で平常心を手繰ろうとする。

「ほら玲さん、深呼吸。吸って……、んで、吐いて……」

言われるがまま深呼吸をするも、楽郎の匂いが胸いっぱいに広がり、ちつとも落ち着けない。

「どう？　ちよつとは落ち着いた？」

「ひえ、ひやいつ」

「うん、あんま落ち着いてないな」

ふつと、息を吐くように笑う声。玲には楽郎の顔が見れないけど、どんな顔をしてるのかはわかった。

目を焼くようなオレンジが透けて、彼を照らす。黒くはねつ気のある髪、形のいい耳、大きな背中。彼に背負われている玲が見れるのは、それくらい。

彼の背中に密着している胸から、痛いほど鳴っている鼓動が聞こえてしまふんじゃないか、なんて。

「玲さん気絶しちゃったからさ」

もう帰る頃だったし、今斎賀家に向かっていると、と楽郎が言う。

玲は楽郎と付き合っている。つまり先ほど夢だと思っていたのは、今日あった現実で、『アート』というだけでいっばいいいだった玲は、楽郎からの刺激で気絶してしまつたらしい。

「すみません、こんな……」

「いや、俺のせいもあるし。ごめん玲さん」

もう大丈夫？ と楽郎が玲に聞く。

「えと……もう自分で歩ける、のですが」

「うん」

その優しい声にも背中を押されて。せつかくくつついているのだから、と顔が見えない分、いつもより少しだけ勇気を持って、わがままを。

楽郎の首に手を回し、彼の耳に囁く。

「迷惑じゃない、のなら……も、もう少しだけ、このまま」

楽郎の歩みが一瞬止まり、再び何事もなかったかのように歩き出す。

「もう少し?」

「はい、もう少し」

「うん」

もう少し、ね。

彼が確認するよう繰り返し、玲を下ろさずそのまま歩く。目の前にある耳は、夕焼けに照らされているからか赤く見えた。

counter

「お兄ちゃん、朝だよー」

「おー」

扉を開け入ってきた瑠美の声にそこそこ重たいまぶたを上げ、その横に表示された『69』という数字に首を傾げた。

「あ?」

……ゲームはログアウトしたはずなんだが。

咄嗟に頭を確認するも、特に機械はついてない。寝ぼけてるのかと思い、目を擦るもそこにはまだステータスのような無機質な『69』という数字は瑠美の横に浮き続けている。なにこれ。

「なにお兄ちゃん、私になんかついてる?」

「ついてるっつーか、浮いているっつーか」

「……寝ぼけてんの?」

ほら、ご飯だからはやく、と急かす声にとりあえずベッドから降りる。ゲームのやり

過ぎで幻覚が見えるようになったのかもしれない。何回瞬きしても消えないそれに、まあどうでもいいか、と俺は思考を放棄した。

……
……
……

頭が冴えたら消えるだろ、と高をくくっていたが、朝飯を食っても数字は特に消えることはなかった。瑠美だけじゃなく父さんと母さんにも数字は浮いており、登校中、すれ違う人それぞれにも、一人一つずつ数字が浮いている。

……ここはリアルのはずなんだがなあ。

何の数値か明記しといてくれませんか？ 父さんと母さんは大体『80』とかそこからで、そこから辺にいる知らん人は大体『0』とか『1』ばつだから個人ステータスではない気がするんだが。

あと、財力パラメーターだったら父さんと母さんは共有で浮いてしかるべきだろ。

俺の数値が見えればなー。不便な事に自分の数値は見えないらしい。リアルでステータス表示ができるようになった訳ではなく、ただ他人になにかわからない数字が見えるようになっただけ。なにかわからないのだから良いも悪いもさっぱりだ。

「ら、楽郎君！」

その声に、後ろを振り返る。

「あー、玲さ、ん？」

は？ 『12971』？

「えと！ お、おはようござい、ますっ！」

「あー、うん、おはよっ！」

「はい！ おはようございますっっ！」

返事をした瞬間、一気に数値が上がった。表示されてる数字は現在『12977』。え、これ、上がるのか。知らなかった。いつものようにぶんぶんと手を振りながら二回目の挨拶を返した玲さんの数字は、また一つ上がって『12978』になった。なにこれ。

「えと、な、なにか、ついてます、か？」

視線を向けすぎたからか、わたわたと髪の毛を抑え始めた玲さんに「いや、なにもついてないよ」と慌てて返す。

……えげつなくないか？ 今まで見てきた最高が父さんの『85』だったのに『12979』って……

うお、また上がった。『12980』。完璧超人ステータスだからだろうか？

話していたらまた上がり、学校に着くまでには『12982』になっていた。

……

……

「今日めつちや斎賀さん見てんじゃん」

追っていた視線を剥がして、その声が出た方へ振り返る。

「……そんなに見てたか？」

「見てる見てる。つーか、今も見てたじゃねえか」

雑ピの横に表示された数字は『63』。玲さんのことを除けばなかなか高い。

「なに〜？ ゲームバカもついに気になる人を目で追うような人間性を取り戻したか」

よよよ、と泣き真似をする雑ピに少しイラツとする。

「いや、気になるというか、数字が気になるというか」

「は？」

何言つてんだこいつ……という視線から逃げるように顔を前に向け直すと、視界に入った玲さんの数字は一つ上がって『12983』になっていた。

……

……

昇降口で、玲さんと誰かが話している。玲さんの数字は見えない間にまた上がったいたようので、現在『12985』である。

玲さんと話している男……たしか生徒会長は『144』。これマイナスにもなんのか。生徒会長つーくらいだから頭も良さそうだし、インテリジェンスな数値ではなさそうだな、これ。いや、生徒会長の蜂に対する慌てっぷりはわりとアホっぽそうだった気も……うーん、これ以上考えるのはよそう。

遠目から眺めていただけなのに、玲さんと目が合った気がした。数字がまた一つ上がり『12986』になる。会話が終わったららしい玲さんが生徒会長にお辞儀し、こちらに駆けてきた。

「ら、楽郎君！」

「ん？　話してたのにいいの？」

「は、はいっ！　大丈夫です！」

「そっか。どうしたの？」

そう聞くと、数字が一つ上がって『12987』になる。

「あの、今日！」

「うん」

「一緒に、えとかえっ……、えと、ろっ、ロックロールに、行きません、か……？」

拳を握りしめながら、不安そうに下からのぞきこむ玲さんの言葉を反芻する。この数字について聞きに行こうと思つてたから、渡りに船だ。

「ロックロールね、俺もちょうど行こうと思つてたところ」

「本当ですか！」

「うん」

俺が頷くと数字は一気に上がつて『12993』になつた。

……

……

「岩卷さんに相談があるんですけど」

「へえく？」

その瞳がキラリと光つた。そのまますつとレジから千円札を取りだし、玲さんを手招きする。

「玲ちゃん、千円あげるから、ちよつとそのコンビニでお菓子買つてきてくれない？」

「え？」

「今から三人で食べるからサ、ちよつと買つてきて」

「え、はあ、」

困惑を滲ませながら、玲さんは受け取った千円札を眺め、チラリと一瞬だけ俺を見て、岩卷さんに視線を戻す。学校からここに来るまでに徐々に上がっていた数値は、また上がって現在『12998』。

「レジから、お菓子のお金を出しても、いいんですか？」

「いいのいいの。あとでまた入れとけばいいし」

あなたが食べたことないのとか買ってきなさい、との言葉に、未だ困惑しながら頷いて、玲さんは店の扉から外へ向かっていった。

「で、楽郎くん。相談って？」

輝きださんばかりの笑顔で、岩卷さんはそう言った。

「人の周りに数字が見える〜？」

「はい。寝ぼけてんのかと思ってたのに今も見えるので、寝ぼけてる訳じゃなさそうっすね」

うろんげな目線をこちらに向けながら、岩卷さんは頬杖をつく。

「ちなみに私と、あと玲ちゃんの数字は？」

「岩卷さんは『58』で、玲さんはさつき……たしか『12998』でした」

うろんげな視線が気のせいじゃなければ更に据わった。

「……他の人は？」

「あー、親が80台、妹が60台、友人が40〜60くらい？　で、知らん人は0とか1でしたね」

「へえ〜」

「あ、岩卷さん『57』っす」

下がるんだこれ。玲さん以外は変動しなかったし玲さんの数値はみるみる上がってくから知らなかった。

思った事をそのまま話すと、岩卷さんの数値はまた一つ下がって『56』になった。

「楽郎くん、あなたさあ、」

そう言つて、俺の顔を見た岩卷さんは、一瞬停止し、にんまり笑う。

「ねえ、本当はもう、その数字がなんなのかわかつてんじゃないの？」

真つ先に私に聞いてくるくらいなんだからサ、と言つた岩卷さんが促した先に、コンビニから戻ってきた玲さんがいた。行つていた間に数字はまた上がつていたようで、現在『12999』。そのまま辿るように玲さんの顔を見て、ドアを挟んでパチリと目が合
わさる。

——玲さんの数字はまた一つ上がつて『13000』になった。

彼の瞳のその熱は、

「それで、シグモニアでさ、」

登校中、昨晚シャンフロであった事をお互いに話し合うのは、いつものパターンとなっていた。楽郎と玲は『ゲーム』という共通項があるから、その話題は、会話のトピックとしては驚くほど有用なのだ。

……なにも有用、というだけではないのだけど。

また、蠍の所へ行つたそうさ。今度は、新大陸の方。

新大陸の蠍たちがいる場所は、聞いているだけでお腹いっぱいになりそうなほど混沌としていた。大量にいる、爆発する蜘蛛、巨大毒百足。そして、ビームで狙撃してくる蠍。

旧大陸の押しくらまんじゅうには手酷くやられてしまった身であるから、それをいとも簡単に周回すらしてしまふ彼に、やっぱり凄いなあ、なんて思いながらいつも話を聞いているのだが。彼はさらに、新大陸にいる蠍たちさえも攻略してのけるのだ。彼と蠍

たちとの縁はどうなってるんだらう、と疑問にも思うのだけど。

あのクソ蠅、と昨日の事を思い出しか吐き捨てるように言う彼は、その瞳の中のみばゆい光を隠しきれてない。その光にまた、玲の心臓がキュウウ、と締め上げられた。

ゲームの話をするときの楽郎は、瞳の中に熱がある。楽しそうな事が見てとれる、そんな熱が。

その熱が見たくて、玲は見ている事がバレないように、いつも楽郎の瞳を見つめている。勉強の話なんかをしているときにはない、声に混じる僅かな弾みも、つり上がる口角も。そして、瞳の中の煌めきも。玲は楽郎のそれが、一等好きだった。

あの日見た光景を重ね合わせて、変わっていないその輝きに、心臓を跳ねさせる。

前を向いていた楽郎が、ふと、こちらに視線を向けた。

その瞳に自分が映る事に夢心地さえ感じる。シャンフロを始めて良かった、と夏に彼がロックロールでシャンフロを購入した日から幾度と思っていることを、また思った。

「玲さんは？」

「へあっ!？」

「玲さんも昨日シャンフロしたんだよね？」

どうだった？ と彼が言う。

それがあんまりにも不意打ちで、言われた事を噛み砕くのに、少し時間がかかった。玲が見ているだけの一方通行ではないことを、つい、忘れてしまひそうになる。

毎日登校を共にしているのに、まだ、心臓は慣れてくれない。痛いほどにぎゆうぎゆうと締め付けてくるのに、酷く甘やかだつた。熱に浮かされ、耳元からもその音が聞こえてくるほど。幸福感で指先まで痺れて、どうにかなつてしまひそう。

それでも、弾んだ息をなんとか落ち着かせ、玲は必死で言葉を手繰り寄せる。

「えあ、え、えつと、昨日は、」

「うん」

また、煌めいた。

ただたどしく募る言葉に耳を傾けてくれてるのがよくわかつて。それだけでも嬉しいのに、瞳の色がもう堪らない。

玲はこの瞳に捕らわれて。ずっと見ていたいなんて願つて。楽しそうな彼に、どうしようもないほど狂っているのだ。

惚れた方が負け、とはよく言ったもので。

「ふふ、それでは、今日はどこへ行きましょうか」

帰り道。『また、ゲームでも、すぐ会えるのですが……もう少しだけ、えっと、いい、ですか?』なんて言われて、毎日のように道が別れる手前にある公園で話すようになったのは、付き合ってから、わりとすぐの事だ。

こちらに笑いかける玲さんは、もうすっかり、とは流石に言えないが、かなり俺に慣れたようで、バグることも少なくなり、穏やかで、あー、……可愛らしい、顔をして、いる。

「あのさ、」

「はい」

俺が言い淀むと、あ、今日はシャンフロじゃなくて別のゲームをしますか? と玲さんが朗らかに返してくる。その声色にもまた、申し訳なさがつのった。

「いや、そうじゃなくて」

「へ?」

ええい、ままよ。

「……無理、させてない？ こんな……ゲームばつかでさ」

俺が生粋のゲーム中毒なのは、もう仕方のない事だが。ゲームばかりやっていて、二人つきりで出かけるのも、普通の恋人よりはずっと少ない。昨日、玲さんとは毎日のようにゲームをしてる、と瑠美に話した時に言われた『え、それ玲さんに無理させてんじゃない？』という言葉が脳にリフレインする。

玲さんは廃人なれど、ごく普通な女の子な訳で。滅多にデートにも連れていかず、自分の趣味に付き合わせ続け、アフターケアも不完全。そんなんだから、『お兄ちゃん、玲さんに甘えすぎ』という耳に痛い忠言には、非常に心当たりしかなかった。

そんなんだから、愛想つかされても仕方ない、とよぎった疑念は、彼女がいくら俺のことを『好きだ』と言ってくれていても、否定するには心もとなく。

「………なんかじゃ、ない、です」

頭で考えていたのもあって、ぼそり、とつぶやかれた小さな声を聞き逃してしまい、「ごめん、今なんて？」と聞き返す。なぜかいつもよりいっそう赤い顔をした玲さんは、俺を見ながら口をハクハクとさせ、それからこぶしをぎゅつと握りしめた。

「………ですから、無理なんかじゃ、ない、です」

「………え？」

疑問の声を上げた俺に、焦るように玲さんは手をバタバタ振る。

「えつと、ゲームでも……どこでも。楽郎君と過ごせるなら、私は楽しい……です、よう！」
ぴしり、と自分が固まった音がした気がした。俺が言葉を返さないからか、玲さんはそのままあせあせと言葉を続ける。

「えつと、あの、そ、それに……前にも言いましたが」

「私は、楽郎君が楽しそうにしてるのを見て、目で追いかけて始めて、」

「……だ、だから、その、楽しそうにゲームしてる楽郎君が、す、……好このまつつ……」

「つ、つまりっ！ そんな、楽しそうにしてる楽郎君の隣にいられるなんて、本当にただそれだけで、私は幸せだなあって」

あ、でも楽郎君が好きな難しいゲームはちよつとやるのは大変ですけどね、なんて冗談めいた声で言われて、もう無理だった。べしんつと叩く位の勢いで、俺は自分の顔を覆った。

——あー、くそ。一番最初に言われた言葉だけでもダメだったのに、さらに追撃してくるとか、オーバーキルだろ。

カツと顔に集まった熱で、そこから中真つ赤になってる自覚がある。心臓も耳から鳴ってるんじゃないかってくらいうるさい。

「楽郎君!? えと、あの、私、なにかおかしな事を言ってしまったか……?」

指の隙間からのぞく玲さんが、俺を心配そうにのぞいてて、ああ、俺はこの人にきつと今後も勝てないんだろうな、なんて悟ってしまった。玲さんは、本当にズルい。当たり前のようにそんなことを言うのだから、もう堪らない。

そんな玲さんに手も足も出ない俺は、まだ手を自分の顔から引き剥がせないまま、ただ「大丈夫、……なんでもない。なんでもないから」だなんて返すことしかできなかつた。

なんてことない朝のはずだった

◇

たとえば。

大きな器に一滴ずつ水を落としていったとする。

雨にもなれないごくごく小さな水滴を、規則正しく、ぽつり、ぽつり、と絶えることなく。

どんなに大きな器でも、それが続けば必ず溢れる時が来る。

つまりはそういうことだ。

ずっと表面張力で保っていた玲の器は、その日決壊した。

清々しい朝のことだった。

……

.....

目が覚めると、常にならないほど身体の調子が良かった。

えもいわれぬ全能感に包まれながら、玲は原因を考えてみるが、特に思い当たる節はない。とりあえず、そういうものなのだろう、と当たりをつけ、いつものように頭のとっぺんから爪先まで痺れてしまうほどの期待と多幸福感に包まれながら、いつものように支度をし、いつものように一部の隙もない身嗜み立ち振舞いで、いつものように己の足で家を出た。

「おはようございます、楽郎君」

「おお、おはよ、玲さん」

眠そうな彼が、玲の方を見て言葉をくれた事実で、胸がキュウウツと締まった。いつものように、そのことを噛み締め、そして、へにやりと玲は笑った。

そんな玲を見て、楽郎が目をしばたたかせる。

「玲さん今日なんか嬉しいことでもあった？」

「……？ どうしてですか？」

「なんか幸せそうな雰囲気だったから」

記憶を遡ってみたが特に特出すべきことは思い当たらなかった。だが、楽郎が言うほどなら、きつとなにかあるのだろう、と玲は自らの状態を探り、天恵を得た。最近当たり前のようになっていたから咄嗟には思い当たらなかったが、玲には毎朝起きるたびに指先まで痺れるほどの多幸福感に包まれる幸いがあるのだ。

「強いて言うなら、」

「うん」

花が綻ぶような笑顔で、玲は口を開く。

「楽郎君と会えて、今日も一緒に登校できるのが嬉しい、ですね」

「……うん？」

ごくごく普通の声だった。

◇

斎賀玲は、ヘタレである。

ああそうだと。斎賀玲は、まごうことなきヘタレである。

……それも筋金入りの。

そのこのとは、見ていることしかできなかつた時代、話の種にするためのクソゲーチャレンジ時代、一ゲーム友達兼同級生《仲良くなったのにまどろっこしすぎてキレそう》時代をすべて彼女を眺め続けたあるゲームシヨップの女主人からは大大大大太鼓判をいただけるであろう。

彼女は、胸中から溢れ続ける恋心を、己の内に押し留め続けていた。雨垂れでも穿てないそれは、確固たる意志からではなく、ただただ彼女が勇気を出せないからであった。中身は膨張し続け、どんどん押しさえつけるための力は必要となるはずなのに、それでもまだ抑え続けた。踏み出す勇気がない故に、ずっとずっと、彼の隣ですらも。

それがどうしようもなくなって、決壊したらどうなる？
こうなるのだ。



今日は間合いが半歩ほど近いな、とは頭の片隅で思っていた。

……いつもは。

いつもは、「おはよう」と言い合ったあと、玲さんはあんな顔で笑ったりはしない。

登校が被るようになったのはじめのころは、挨拶するたびにバグったりしていたわけだが、最近ではそうでもなかった。普通にそのまま、ただ、会話コマンドへと移行するだけだ。

だから、普通に、何気なく、意図もなく聞いたただけだった。俺にとっていつもの会話の取っ掛かりにすぎなかった。

パンドラの箱を開けたようなことになるなんて、思っすらいなかったのだ。

何かが、違う。

おそらくいつもと前提条件が違う。ああ、『嬉しい事』を聞いただけでこんなことになるとは誰も思わないだろ！

「楽郎君？」

「えっ」

「どうかしましたか？」

「いやっ、なんにもないけど」

落ち着け。いや、本当に。玲さんにも、変な意図はないはずだ。ただ俺に聞かれて答えただけ。俺だって、玲さんとは普通に話してるだけでも楽しい。それが、ちようど質問の答えとして出てきただけなんじゃないか？

ああそれでも、『楽郎君と会えて、今日も一緒に登校できるのが嬉しい』だなんて、シャフロの情報交換や、登校する話し相手を抜きにした、俺「個人」に付加価値があるみたいだ、と。

じわり、と何かが侵食してくるのを自覚した。言い様のない焦燥感が頭を支配する。この侵食は、止めなければならぬ、と警鐘が鳴る。

とりあえず、歩きながら半歩ほど玲さんから遠ざかる。一步半詰められてさつきより近くなった。なんで？

天を仰ぐと、空は憎々しいほど青い。

——いつもは玲さんといると短く感じる通学路が、やけに長く感じた。

クソゲーカセットは抜けない

「え？ それ関係なくない？」

ふわふわとした銀色が前髪の跳ねた癖ごとピシリ、と固まったのを、アーサー・ペンシルゴンは視界の端で認識しながら溜め息を吐き、言った。

「そりゃ、」

ないんじゃないの？

今、随分と配慮に欠けた発言をしたサンラクと、その隣で固まっているサイガー0は、確かりアルで付き合っていた、はずだ。

くつつくまでの過程でこちらも随分やきもきさせられたので、やつとくつついたことには思う存分からかってやろうと思っていた、のだが。

——『関係ない』とはどういうことだよ。

ペンシルゴンは心の中で悪態をついた。

レイは彼女だけの唯一無二の装備により、顔の大半が覆われており、その表情はうかがえないが、おそらく真っ青になっているのだろう。仮にも彼氏である男に、こんなこ

とを言われてはさもありなん、といったところである。

少なくとも今の内容は恋人として、『関係ない』と言ってしまふのは、少々、いや、かなり不適切であろうに。

「そりやないつて、またなんで?」

「なんでもなにもさあ、」

恋愛機能がついていないんじゃないかと思っていた男がついに『お付き合い』なるものを始めたと思ったらこれだ。本質は何も変わっていない。クソゲーとエナドリに、精神の根本を破壊尽くされている。

「そんなに言われること言っていないと思うんだが」

俺とレイさんで完結してるんだから、そんなのなんも関係ないじゃん。

……あ、こいつ、おかしい。

続いた言葉によって気づいてしまったのでとりあえず詳しく突っ込んでみると、要領を得なかつたが、つまり、真意として、サンラクは、

「はいはいなるほどそうですね〜! お前のその考え方だったら確かに関係ないですね〜!!」

「なんでキレてんの?」

恋人という枠に入っているのだから、その他の人間は俺たちとはまったく関係ないだろう? と言ってるのだ。思考回路が理解できない。

そんなラベルの張り替えだけで人間を把握するような考えが通じるのはゲーム内だけであって、現実には持ち込むようなものではない。嫉妬だとか不貞だとかそういう概念はないのか?

ゲームが頭に侵食しすぎである。

「それにしても『関係ない』はないわ」

呆れを滲ませ、ペンシルゴンが言う、きよとんとしたように首を傾げた。

「え? だってレイさん、俺のこと好きだよね?」

「ふぁえッ!」

「ほら」

当たり前前の事を聞いて当たり前前の事が返ってきた、というような顔で、サンラクは悪友に向き直った。

横でわたわたしている少女の反応を、当たり前前のように享受して。

ペンシルゴンはついにキレた。

「いつか好意に胡座かいてるしっぺ返しを食らえ、このバカ!」

バカ!

「自惚れ方、エツグ……」

ペンシルゴンの叫びも、ボソツとカツツオが呟いた言葉も、サンラクはさらりと無視した。おそらくまた思考をクソゲーに飛ばして耳に入っていないのだろう。

「レイちゃん……可哀想……」

こんな馬鹿とお付き合いなるものを……

ぶしゆうく、と煙が出たまま固まっている少女と、いまだにきよとんと、なにもわかってないような佇まいの鳥頭に、ペンシルゴンは一層深く溜め息を吐いたのだった。

SS再録

『自覚後告白RTA』

—— ああ、俺は、

「玲さん」

「へ!？」

胸に灯った熱に従うまま、玲さんの手を掬い上げ、己の胸の前で握る。電撃の如く落ちてきた「それ」以外、なにひとつ考えてられなかった。溢れでる情をその勢いに乗せ、頭で理解する前に口から射出する。

「好きだ」

「へ!？」

「俺、玲さんの事が好きだ」

『りようかたおもい』

「楽郎君、大丈夫ですか？」

「……なんで？」

「えと、顔が、赤いですよ……？」

ああ、くそう。この人は……！

玲さんのせいじゃないか、とはもちろん言えない。

「玲さん!?! 大丈夫!?!」

楽郎君のせいじゃないですか、だなんて口が割けても。

『宝石なんてモノじゃない』

※おそらく付き合ってる

満月に手を翳していたら、感傷的な気分にもなるわけで。

「空から欠けの無いダイヤモンドが落ちてきて、あまつさえそれがなんの偶然か自分の物になっちゃったらさ、どこか罪悪感を感じてしまうんだよな」

皆が皆、その価値を信仰してる事を知ってるから特に。

「……なんでそんなよくわかんないみたいな顔してるの?」

「だって、楽郎君の笑顔を初めて見た時から、とつくのとうに砕け散って楽郎君だけのものですよ?」

きよとん、とした顔でそうのたまうから参った。

『神様なんてガラじゃない』

※好きな時間軸でどうぞ

「一方通行に祈っているだけだと思ってたんです」

……だから、まだ実感できなくて。

溢れた声は溶け消えていった。

「光って、平等なんですよ。まぶしくて、目を眩ませて。私もただそれに照らされたひとりだっただけなんです」

どうしてその考えに至ったかわからないけど、認識の仕方おかしくない？
だって、

「あの夜の狼と一緒に挑んだ時から、ずっと隣（こし）にいるじゃん」

うーん、そんな驚いた顔されるのは心外なんだが。

『好きだ、くらいは言わせて欲しい』

(もうそろそろ逃げるの止めてくれる?)

※付き合ってる

ああ、だってこれだけはどうしようもなく自惚れてる。

「玲さん、俺のこと好きでしょ?」

ピシリと固まった玲さんの手を逃げられないように捕まえる。

「ね、玲さん」

これだけ自惚れさせたんだから、もちろん責任とつてくれるんだよな？

『玲さんからは初めてだったからさあ！』

※付き合ってる

いつまで経っても慣れないみたいで、もう『初めて』の時からずいぶんと時間が経つ
のにな、と思いながらカチコチに固まった頬を指で撫でる。

唇の柔らかな感触と共に、花のような甘い匂いが鼻を通り抜けていった。

視界が一瞬暗くなり、唇に、柔らかな感触。

「それでは楽郎君！ ま、また!!」

甘い匂いはまだ残ってる。

「玄関先でするには話長くない？ ん？ 玲さん帰ったの？」

え？

「あれ？ お兄ちゃん？ 聞こえてる？ おーい、お兄ちゃん？」

……え？

『崖つぶちにてタップダンスを』

※付き合つてない

根幹を焼き付くされる危機感に対する本能的な防衛反応が、じりじりと胸を焦がす。しかし、それがなんで沸き上がってくるのかはこれっぽっちもわからない。それでもただ『まずいな』と頭の中で繰り返し返す。

数ヶ月前からずっと変わらないことをしているだけだ。今の時間をいつも楽しいとすら思っている。それなのに、一歩進むたびに、崖の淵へ近づいていくような。

「ふふ」

隣で歩く玲さんが笑う。

——ああ、まずい、な。

『致命傷』(FATALITY……………)

※付き合つてない

「楽郎君！」

玲さんが振り向く様がスローモーションで見える。このままいくと、とんでもないことになることを直感した。アラートが頭の中で鳴り続け、それでも俺はそのふわりとした茶色が揺れるのを眺めているだけで、目をそらすことすらできない。とある世界で

【最大速度】を取っていいようが、現実ではそんなの意味がない！
「楽しいですね！」

正面からその笑みを叩きつけられた瞬間、最近ずっと感じていた焦燥感の答えと共に、俺は先ほどまでの焦りが的中したのを思い知る。

『箱庭の天使／in outside world』

※捏造過多

※斎賀玲さんの好きなものが散歩であることについて

幾つかの箱庭と、それを繋ぐ金属の箱の中だけが彼女の世界だった。それに疑問をひとつとして浮かべないまま、一度たりともそこからはみ出すことはなかった。ひとりで箱庭の外に出ることなど、頭を過りすらしなかったのだ。

——そう、今日までは。

アリスが走る兎を追いかけける。彼女は、己が別世界に迷い込んだ事に気づかない。その笑顔で走る黒髪を追う事だけが、脳内すべてを占めている。

『このあと再起動まで5分かかった』

※付き合ってる

腕の中にすっぽりと入った柔らかかなものが、ビクリ、と身体を震わせて動かなくなつた。

たぶん、これはフリーズしたんだろう。

それがわかるくらいには一緒にいたし、どういう時にそうなるかだつて既に理解している身だ。

だけど、熱いのはなにも、この人の体温のせいだけじゃない、ので。

状態『混乱』に陥つてる玲さんには悪いけど、今はちよつと離してやれそうにないし、もう少しだけ。あと少し。もうちよい。あとちよつと。

『期待だけでもさせてください』

※付き合つてない

今、自分たちが走つてる理由なんてもう、衝撃ですっかり忘れてしまった。

真つ白になった頭は稼働することもなく、ただ己の手を引きながら走る黒髪に必死でついていくことだけしかできない。

それでも、彼のことだから、意味なんてきつとないってわかつてるのに。頭の少しだけ冷静なところで、この繋がれた手にこもった意味を探つたりもする。

『そうして彼女はヒトになった』

※ド幻覚

『そう』あることは当然だった。

太陽が東から昇るのと同じように、斎賀玲は『そう』だった。

だから、己の特異性にも気づけない。

「なんで、あんなに嬉しそうに……楽しんで……？」

彼女は知らない。背中に生えていた羽も、それがたつた今溶け落ちたことも。

彼女は、ただ。モノクロームだった世界が衝撃で色づいていくのを、目の当たりにすることしか。

『あなたとならどこへでも』

※おそらく結婚してる

あなたとならどこでだって楽しいから

目蓋が開いていく。その瞳が灯す熱に、玲はもうずっとずっと狂わされている。

「おはようございます、楽郎君」

ぼやけた瞳が彼女を映す。胸がこれ以上なく締め付けられた。意思が見えるようになっていくそれは、太陽の光で煌めいている。玲は笑った。

「今日はどの世界へ行きましょ^{ゲームで遊び}うか」

『日の出にてまた生まれる』

※妄言過多

人は二度生まれるという。一度目は母の腹から出現したとき。二度目は自我が発生したときだ。そして玲の二度目の生誕は、〔彼〕の存在をはじめてまともに視界に入れた瞬間なのだろう。

あの引き伸ばされた一秒間。光によって世界が色づき始めたあの雨の日。太陽が昇る。玲は己の憂鬱さと対照的なそれに、疑問という自我を得る。

『私はアドバイスしかしないからね』

※付き合ってからのはじめての誕生日

玲さん、お兄ちゃんのあげたものならなんだって喜ぶでしょ、という言葉で瑠美は飲み込んだ。たとえ兄の恋人が瑠美の理解できないクソゲー詰め合わせセットや、なんならそこら辺の石すら喜びかねないとしても、それはプレゼント選びを妥協する理由にはならないからだ。

「お兄ちゃん、まともな人間みたいなこと言えるんだね」

「俺をなんだと思ってるんだよ」

『ズルくない？それ』

（いや、確かにそれを刷り込んだのは俺なんだけどさあ）

※付き合ってる

ああ、本当にズルい。

玲さんは、こんなにも全身で『好き』だと伝えてくる癖に、俺が感情を返す可能性なんて微塵も考えちゃいないのだ。

というわけで、ことあるごとに（といっても俺がそう思った時にだけだが）俺は玲さんに対する好意を本人に伝えることにした。なにも玲さんだけじゃないってことを思い知ればいい。俺の苦労もついでに思い知ってくれ。

「だって楽郎君は私のことが、好き、なんですもんね？」

その確信しきった顔といったら！

短編再録

『主人公のせいで難聴系にならざるを得なかった系ヒロイン』

「へあつつつ!? え、ついやつ、えつと、あの、そ、そうですつ、ねつつ……!?!」

「あ、うん」

言った瞬間に『ヤツベ、会話の選択肢ミスったな』となったものの、幸いにも玲さんは何も気づかなかつたらしい。今俺、思いつきり口説いた気がしたんだけど。玲さんつてもしかしてギヤルゲーの主人公みたいな難聴系なのか……?

ぶつぶつと「……君がこうなのはいつも……君がこうなのはいつも岩巻さんも言っていましたこういうとき……君は何も考えてない特にそういつた意味はないんです……君がこうなのはいつも……君がこうなのはいつも」などと何やらつぶやいているようだが、声が小さすぎていまいちよく聞こえない。

顔の赤さも、挙動も、いつもと同じように見える。バグってる時の玲さんそのままだ。

「玲さん?」

「びえっ! は、はい! なんででしょうか?」

やっぱいつもみたいに変なバグってるようにしか見えないな。まあこれは、俺の気持ち

バレなかったのでセーフ、ということ……いや、今の相当な事言つたあれで気づかなかつたのを考えると今後伝えようとしても伝わらない可能性があるのか。

それは、ちよつと困るなあ、なんて思いながら玲さんの方をうかがうと、視線に気づいた玲さんが俺の方を困つた顔をして見た。

「……えと、あの……どうか、しました、か……？」

「……ん、いや、なんも」

これは、これから苦労するかもなー。

最近折り合いをつけ始め、やつと認めた感情とその想いの先を思つて、俺は苦笑した。

『御伽話』

子供の頃、御伽噺の王子様とお姫様の事が、よくわからなかつた。

硝子の靴を落として逃げた娘を探した王子様も、泡沫となつて消えた海のお姫様も、月へ帰ろうとするお姫様を呼び止めようとした帝も。なにも、わからなかつた。

だつて、別に、その人じゃなくなつていいじゃないか、と幼いながら玲は思つたのだ。苦労したり、死んでしまふくらいなら、そんなたつた一人に執着なんてしなくてもいいじゃないかと。

母も、きつと姉たちも、そして、ずっと遠くの事だろうが、恐らく自分も。斎賀家の者は、お見合いをして結婚をする。昔からそうなのだから、自分だって例外ではない。それと同じように、『運命』なんてよくわからないものじゃなくて、結婚するだけならお見合いをすればいいじゃないか、なんて。ただ、本当にただ純粹に、そう、思った。今ならわかる。

狂おしいほどの衝動を、たった一人のその人じゃなきゃいけない理由を、玲は既に知っている。

『最近流行りの恋の歌』

◇

いつもだったらそんなことはしないのだけど。

「~~~~~、~~~~~、~~~~~」

気がつけば、恋の歌を口ずさんでいた。

昨日偶々聞いた曲が、あまりにも共感できる内容だったからか。待ち人がまだ来ないからか。

カラオケに行く時は、想いを込めすぎて重たくなってしまいうから、歌わない恋の歌を。

目を閉じて彼を想いながら。

「玲さん」

パチリと目を開く。

「つあ、お、おはようございます、楽郎君」

「うん、おはよ」

あくびをした彼には、玲の歌は聞かれていないようだったから、ふ、と安心して玲は笑った。今日もあなたと会えたから、きっといい日になるのだろう。



少し遠くにいる玲さんに声を掛けようとして、僅かに聞こえてくる音に黙った。瑠美もテレビを見ながら歌っていた、最近流行りの歌。

わからないなりに、上手い事がわかる。そんな歌声。

脳まで届いた瞬間、玲さんは誰かが好きなんだ、とふと、気づいた。

『未観測』

「…………ら、楽郎、君？ えと…………、どうか、しましたか？」

「へ？」

なんで今その質問？ そんな疑問が顔に出たのか、玲さんは慌てたように言葉を続け

る。

「いえっあのつつ、えつと……こちらをじつと見ていましたので！ なにかあるのでしようかと！」

勘違いでしたらすみません！　と言いながら、玲さんは両手をシュババババと音が鳴るほど身体の前で振る。いつも思うけど、どうなってるの、それ？　いや、それよりも、

「え、見てた？」

「へあつ、は、はい！　おそらくー！」

おそらく……？　玲さんは勢いよく拳を握って頷く。あー、特に自覚はなかったけど、言われてみれば確かに見てた、な。

「……んにゃ、なんでもない」

「そう、ですか……？」

それなら、いいのですが、と続けた玲さんが握っていた手をゆっくりとほどくのを見届け、俺は玲さんから視線をひっぺがした。

『たとえばそれは、』

※たぶん結婚してる。プロゲーマー時空。

「負けちゃった」

「はい。見てましたよ」

「いやー、惜しかった。あそこでワンステップ遅れなければ勝てたのにさ」

「はい」

「やっぱ一瞬動きがあそこで止まったのがよくなかったな。いやー、惜しかった」

「はい」

「……………」

「楽郎、君」

見透かしたようにこちらに手を伸ばすから、誘われるままに彼女に抱きつく。

「あーくっせ、」

「ワンステップだぞワンステップ。あれさえなけりやあいつに勝てたのによー！」

「はい。悔しい、ですね」

駄々こねて、甘ったれて、非情にカツコ悪い。でもそんなところも受け入れて、逆に
見せてほしいなんて言われたら、もう勝てない。

誘われるがまま抱きついただけじゃ、昔みたいにはもうバグらないし。甘えさせてく
れるような余裕まであつて。

それも、少し悔しかった。

クスクスと、耳元から聞こえてきた鈴のような笑い声に、じとりと玲さんをねめつける。

「……なんで笑うの」

俺の鋭い視線をもとめせず、玲さんは俺の肩に顎を乗せ笑う。

「いえ、楽郎君ってわりとカッコつけたがりな所がある、ので」

耳元から、柔らかな声が囁く。

「こういう所も、見せてくれるようになったんだなあつて」

あまりにも嬉しそうに言われてしまうから、俺はもう唸ることしか出来なくて。

「ひゃっ」

玲さんを抱き締めたまま、彼女の後ろにあつたベッドに押し倒した。

『Before she knew...』

スポットライトが当たったように、彼の周りだけ輝いて見える。ふわふわとした浮遊感。そのまぶしさに目がくらむ。

「——」
 どしゃ降りな雨の中、太陽が痛いほどの快晴の中、なんてことのない曇天の中。瞬き

するほどの間に景色が切り替わり、それでも口の端をつり上げた彼は変わらず、なにかを言つて駆けていく。

その言葉はなぜか聞こえなかったけど、彼がなんと云つたのか、玲はすでに知つていた。

ぱちんつと弾けるようにして、見ていた光景が消え去る。

「ん……」

まぶたに透ける光を感じながら目を開ける。時計に表示されているのは、いつもと同じ時間。玲は布団から出て、朝の仕度を始める。

どうしてかわからないけど、彼の笑顔を見てから、玲は毎日のようにあの雨の日の情景を夢に見る。

それだけじゃなくて、その後見た、彼が帰る時に見せる笑顔も。

クラスメイトである陽務楽郎の事を、玲は無意識に、気がついたら目で追いかけるようになっていた。一言だつて話やしないのに、毎日彼を目に焼き付けている。

友達と話して笑い合う姿も、授業中少し眠たげにしている姿も。そして、帰る時の笑顔も。

玲は目で追いかけることで、彼の事を少しだけ知った。

あの笑顔を見続けていれば、なんであんなに楽しそうなのかもわかるのか、なんてずっと考えてる。

もつと彼の事が知りたい、という渴望がどこから沸き上がってくるのかなんて、今の彼女はまだ知らない。どうして彼を夢に見るのかも、今の彼女はわからない。

それでも、今日もあの笑顔が見れるといいな、と考えながら、玲は毎日中学校へ向かうのだ。

『はるだまり』

春の陽気というものは、なぜこんなにも眠気を誘うのか。カーテンの隙間から覗くチラチラとした光がまぶたの向こうから照らし、ぬるま湯の中にいるような温度が身体を包む。ちよつと日光浴でもしようかと思っただけなのに、満腹感も相まって溶けそう

だ。
そんなことを考えてると、光を遮る影。

「楽郎、君？」

寝てるん、ですか？ との声に目を開けると玲さんが俺をのぞきこんでいた。

「んー……まだ寝てない……」

「こんなところで寝たら、風邪を引きますよ?」

寝るのならベッドの方が、と言つてしやがみこんだ玲さんは光に照らされてまぶしい。そんな玲さんに向かつて、俺は自分の横にスペースを開けた。

「玲さん」

「へ?」

「ここ、と示すと、真っ赤に染まって一瞬フリーズし、随分慌てたあと、覚悟を決めたように「し、失礼しますっ、」と俺の腕の中に入ってくる。

腕を回して柔らかな肢体を抱き寄せると、ピクリと身体が跳ねたものの、俺の胸にすり寄ってきた。玲さん特有の花みたいな匂いが鼻をくすぐる。

「今日は暖かいしよ」

「……はい」

「休日で、やることも特にないし」

「……はい」

玲さんは体温が高くて、とろりとまた眠気が襲ってくる。

「玲さんがいれば、暖かいからきつと風邪も引かないし」

「……はい」

一緒に惰眠を貪るのは、どう? なんて質問に、小さな声で了承が返ってくる。それ

に少し笑って、玲さんをもう少しだけ近くに抱き寄せて、俺はそのまま睡魔に身を任せ
た。

『自覚』

あー、玲さんのそういうとこ、好きだな。

「ん？」

今、俺なんて思った？

「……？ えと、どうか、しましたか？」

足を止めた俺を、心配気にのぞきこむ玲さんを見て、思考がピタリと停止した。

「え？！」

「え、あの」

……俺が、玲さんを？

「え？」

「楽郎、君……？」

は？ いや、落ち着け落ち着け。

「いやいやいやいや」

「えと、大丈夫ですか？ なにかありましたか？」

いきなり挙動が不振になった俺に対して、困惑してはいるものの、玲さんはいつもと変わらない。

そんな玲さんのことが、俺は？

「いやいやいやいや、なんでもないです」

「え？ いや、でも……」

「なんでもないです」

「は、はい」

「なんでもないんだけど、おれはいそいでかえるよていができたのではしつてかえります」

「え、あ、はい。では、お気をつけて……？」

「はい、じゃあまた」

うあ——————!! 俺は！ 風に！ なる!!

頭の中で叫びながら、走って家に帰った俺は、玲さんがつぶやいた言葉をついぞ知ることはなかった。

「……もう少し、楽郎君と一緒にいたかったなあ」

……

……

「天誅ツツツ!!」

いやいやいやいやいやいや、違う違うそういうことじゃない。そういうことではないはず、いやいやいやいや違う違う違う。

これは玲さんのことが人間的に好ましく思ったというわけで決してそういう恋だの愛だのです、きき? とかそういうのでは……? いやいやいや。

勢いよく走って帰路について俺は家に入り速攻幕末を起動し、今に至る。頭を空っぽにするにはここが最適だと思つたが雑念は頭に居座り続けて出ていかない。

「あつ、レア武器庫祭囃子! ここであつたが百年目……! 天ちゆ、つぐあつ」

「そーいうことではないはずなんだよ!!」

身体に染み付いた動作で襲ってきたやつをとりあえず天誅する。

玲さんの事は尊敬してる。それは確かにそうだ。その在り方を人間的に好ましく思っているし、ゲーム友達として仲良くしてる。

だけどそれとこれとは別だろう。恋愛とかいうのは俺には大層程遠い概念だとか、関係ない概念とかいうか。こう、いや別に玲さんの事を嫌いだとかそういう話ではなくむしろ好……

「ぐああああああー!!」

目の前に来た奴をとりあえず切り捨てる。

だから違う！ 決してそういうのじゃねえ!!

……

……………

「ら、楽郎君、おはようございますっつ」

「……………ん、おはよ、玲さん」

昨日のは勘違いだったということだけでケリがついたので俺は動揺しない。昨日今日とで玲さんとすぐ会う事になろうとも、だ。すべての動揺は幕末に置いてきた。俺はソークールな男……………!

「えと、昨日は大丈夫でしたか?」

「あーうん。うん。昨日ね。うん。……………大丈夫だったよ?」

そういうえば予定ができたとか言って走って帰ったんだった。動揺していると詰めが甘い。

俺が動揺していようとも、玲さんは変わらずいつもと同じように俺の隣に並ぶ。いや、別に俺は動揺なんてしていないが。

そうですか、と言って玲さんはふわりと笑う。

可愛いな。

……………は？

ゴンツツツツ

「楽郎君!? 大丈夫ですか!」

「へーきへーきなんともない大丈夫。ちよつとそういう気分だっただけだから」

いきなり電柱に頭を打ち付け出した人間にも最初にも心配が出てくるんだよな、玲さんは。

そして俺はなにも思わなかった。電柱に頭をぶつけたからさつきまで考えてた事を忘れた。俺は、なにも、覚えて、ない。よし。

——学校に着くまでに計五回頭をぶつけたなんて、んなアホな事俺がするわけ……

『好きだから甘いのであって』

「つあッ!!」

「玲さん、大丈夫?」

いつもみたいにからかつていたら、バグった時の音が違った。これは口のどつかを囁んだな?

「つ、えつとあの、大丈夫！　大丈夫ですから！」

「ほれ見せてみ?？」

誤魔化そうとするが、そうはいかない。俺がからかったのが原因なのだから、心配くらしいさせて欲しい。隠すようにしている手をとり、無理矢理こちらから口を見えるようにする。

「つあらくろ、く……」

「あー、血が出てる」

彼女の唇をなめる。鯖癌ゲイムでなめた血よりも、ずっと現実リアルなはずなのに、それはよつほど甘かった。

『薄氷吐息』

(……楽郎、君)

目の前に見えた柔らかな黒髪に、頭の中で呼びかけた。まだ声に出しても聞こえないような、周りから見ても知り合いとすら思われないような、他人の距離。

——ふと『自分はどこまで許されているんだろう』と頭によぎった考えに、足がピタリと進まなくなった。

たった数ヶ月前までの、そして数年続いた、話しかけすらできなかつたあの頃。同じ

中学、高校というだけで、彼と接点はなきに等しく、あの瞳に映ることさえできなかった。

胸に霜が這うような心地がして、手で胸元を握り締める。今、自分は彼に話しかけてもよかつたんだろうか。彼の近くに行くことは、許されていたんだっけ？

唐突に、目の前を歩いていた黒髪が揺れ、振り向いたその瞳が玲をとらえる。

「……あ、玲さん。おはよ」

その顔を見た瞬間、身体中のぼせ上がって、霜なんか蒸発した。

(ああ、今の私は彼の懐に入ることが許されているんだ)

何気ない気の抜けた挨拶だけで、玲がどれだけ救われているかなど、楽郎は知らないのだろう。はやる気持ちを抑え、玲はいつもの痛くて甘い言葉を返すために彼の方へ駆け出した。

『終焉でも』

「明日世界が終わるなら、楽郎君はなにをしますか？」

「んえ？」

ちよつと思いついたただけなので別にあの、答えなくても、と目の前に座る玲さんが言いつのろとを見て、俺は口の中にあつたものを飲み込む。

なにをやっても凄いのは、さすが玲さんだよな。完璧超人という言葉が似合う人間が確かに存在していることを、共に時間を重ねる度に実感させられる。

材料があつたから作ってみた、というチーズケーキは、店の物と遜色ない。というかむしろ下手な店よりずいぶんと旨い。

甘いものは苦手じゃないが、まあケーキなんかは機会がなきゃ食べない程度。だが、甘過ぎず後味もさっぱりしているこれはいくらでも食べそうだった。

それで、もしも世界が終わるなら、だっけ。ゲームのストーリーでよく聞くよな。

「俺はゲームする、かな」

まあ現実のサ終っつーこつたる。クソゲーは風の如くサ終していくが、現実というものはクソゲーなのでサ終してもおかしくはない。

どうせ世界が終わるなら、それまでパーっと楽しく過ごす。それが終わる世界に俺たちができるせめてもの手向けだろう。例えクソゲーでも、現実でだつてそれは変わらな
い。

「玲さんは?」

「そうですね。……では、私もゲームをする、と思います」

「へえ、意外」

玲さんはシャンフロ廃人だったが、世界が崩壊するほどの事が起こつてなおゲームに

執着するほど、ゲームには思い入れがあるとは思ってなかった。それでも最後にゲームを選ぶのか。

「そんなにゲーム好きだった？」

そう聞くと、紅茶の入ったティーカップを両手で包むように持ち、玲さんは少し照れたように微笑む。

「楽郎君といれるなら、どこへでも」

いつもならバグるようなセリフを当たり前のようにごぼされ、誤魔化すように口にケーキを突っ込む。さつきまではさつぱりしていたはずなのに、胸焼けがしそうなほど甘さが口の中に広がった。